

「おや」

がんりきの百蔵もギョツとして腫を定めてそれを見る、最前から其處で我々を凝視してゐた人影一つ、荒涼たる焼野原を透して、宮川の外れから白山々脈が見えようといふ處、月の晩ではないのに、その輪廓が白くぼかしたやうに浮き上がつてゐる。

「おや……」

がんりきは、たちろぎながらその物影を篤と見直すと、覆面をして、著流しのまゝで、二本の刀を帯びてちつとこちらを睨んでゐる。

こいつは辻斬だ！ はあて、飛彈の高山でも辻斬が商賣になるのかな。

丁度、下に置いてあつた屑屋のがんどう提灯を、がんりきの百が手にとつて、その異形のものにさしつける途端、

「あつ！ いけねえ」

すさまじい音をして、がんどう提灯が數十間の彼方に、ケシ飛ぶと共に、がんりきの百も眞に數十間ケシ飛びました、同じケシ飛んだのではあるけれども、がんどうの方は飛んだ

處へ行つて留まつたが、がんりきの方は横つ飛びに飛んだまゝ、街道の道へ出ると、一層の速度を加へて、無二無三に走りました。そのあとで、

「助けて——」

屑屋も亦、がんりきと同じやうにケシ飛ばうとしたけれども、それは無理で、ドウと音がして、やがてザンブと水が鳴つて、さうして助けて！といふ聲が地の下から聞こえたのは、焼跡の側の、崩れた井戸へ落ち込んだものと見える。がんりきの百は無情にも、屑屋の急を救はんとせず、救ふの違もなく、遮二無二走ること……彼は八町餘りにして一つの物體に有りついて、そこで、息をきりました。

「あつ！ 何てザマだ」

そこで、自分ながら愛想が盡き果て、しまつたものゝ如く、額から首筋の汗を拭つて、さうして、星もない空を恨めしさうにながめながら、

「ザマあ見やがれ」

幾度も幾度も自分を冷笑しきれないのは、考へて見れば見る程馬鹿らしい。

が、い、どうを差しつけたまではわかつてゐるが、それからあの辻斬が果して自分へ向いてのしかゝつて来たのだから、どうだか、今考へて見ると雲を掴むやうだ、あゝした瞬間にたつみ上りに覆面の者からのしかゝられた力にたまたらず、振りもぎつてがむしやりに逃げ出したこつちのザマは話にも繪にも描けたものぢやねえ——

それがよ、假りにも、が、ん、り、き、の兄いともあるべきものが、飛弾の高山くんだりへ来て、追剝か辻斬か異體の知れねえのに脅かされて雲を霞と逃でたとあつちやあ、——第一七兵衛兄いなんぞに聞かせようものなら生涯の笑はれ草だ、だが、どうして、おれは、こんな逃げなけりやならなかつたのだらう、が、ん、り、き、をつきつけりやあ向ふも驚かあ、向つて来たら、こつちもが、ん、り、き、だから一番飛弾の高山の辻斬の斬つぶりを見てやらうぢやねえかといふ、いたづら心十分でやつた仕事なのに——意地にも我慢にもあゝのしかゝられては逃げ足が先で見えも外聞もなくこゝまで突走らされ、斯うして立ちすくんだのは、一體どうしたといふのだ。

## 五十七

考へて見れば夢だ、幽霊を見たんだ、お化におどかされて逃げたんだ、馬鹿々々しさこの上なし、氣の毒千萬なのは層屋のおやぢよ、あわてゝ井戸へおつこつたらしいが、危ないこつた、それを見すく、手を出してやることも出来ねえで、命辛々、こゝまで逃げ伸びたが、ん、り、き、の心根が、自分ながらつくづく不憫でたまらねへ、が、ん、り、き、の百ともあるべきものが、飛驒の高山へ来て辻斬のお化におどかされたとあつてはもうこの面は東海道の風にあ吹かせられねえ——憚りながら、このが、ん、り、き、の百蔵は、見てくんな、斯うして右の片腕が一本足りねえんだぜ、向ふ傷なんだ、この片一方の腕に對しても、面が合はせられねえ仕儀さ、何とかしてこの腹藏せをしねえことには、この蟲がをさまらねえ、と云つて、氣の利いたお化はもう引込んでゐる時分に、またも現場へ引き返して、虚勢を張つて見たところで、間抜けの上塗であり、抜からぬ面をして、おちいさん、井戸は深いかえ、も聞いて呉れる。

一體、こゝはドコなんだらう、お寺だな、かなり大きなお寺の門だ、なある程、飛驒の國は山國だけあつて木口はいゝな、可なりすばらしいもんだが、何といふ寺なんだ、名前も何もわかりやしねえ。

さて——と、今晚、これから落ちつくところは、自暴<sup>やけ</sup>だな、自暴と二人連れで、この腹藏<sup>はらざう</sup>せに乗り込んで見てえ處はさ、目抜き<sup>めぬき</sup>の處はすつかり焼けてしまつてゐて、どうにもならねえ。

今になつて、思ひ出したのは、あの御用提灯<sup>ごようていとう</sup>と陣笠と打割羽織の見まはりだが、あの見廻りのお上役人<sup>かみやくにん</sup>だか土地の世話役だかわからねえが、おいらの眼と鼻の先で、乙なことを云つて聞かして呉れたつけなあ。

その事、その事、それを今こゝんとここで思ひ返してゐると、何だかゾク／＼虫酸<sup>むしす</sup>が走つてくるやうだぜ、此處のお代官がなかなか好者<sup>すきもの</sup>で、そのお妻さんが百姓出の娘には似合はずまた輪をかけた好者で……旦那をいゝ加減にあやなして置いちやあ、中小姓であれ、御用人であれ、氣の向いた奴には、相手かまはず据膳<sup>すえぜん</sup>をするとか何とか、そいつをお前高山へ

早々のが、んりきの鼻先で臭はせて下されるなんぞは氣が知れねえ、そんなのを、今までトント忘れてゐた此方も人が好過ぎるぢやねえか。

一體、そのお代官邸てのはドコにあるんだい、ようし、一番夜明けまでには、まだ一仕事の際<sup>すまひ</sup>は、たつぷりあらあ、そのお代官邸てえのへ、一つ見參して見ようぢやねえか、これから夜明けまでその百姓娘上がりだといふ手取者の好き者のお部屋様ところへ推參してそこで一ぶくお先煙草の御馳走にあづからうぢやねえか。

いゝ處へ氣がついた、なあにこれだけの處だ、誰に聞かねえつたつて、走つてゐるうちに代官邸らしいのにぶつつかるだらう、そのお部屋といふのが、さういふお前、話の分つた女であつた日にやあ、土臭い地侍ばかり食べつけてゐると違つて、こつちもが、んりきの百だよ、野暮におびえさせてお説教ばかり聞かしても居られねえ、話がもてゝ來た日にや夜が明けても歸さねえよ、てなことになつて來る、折角、訪ねて來たが、んりきの爲に野を清めてしまつた上は、今の御定宿は一つ、そのお代官邸のお部屋様のお座敷と、斯う云ふ寸法に定めてやらうぢやねえか——まあ、待つて呉んな焦<sup>あせ</sup>いては事を仕損ずる、それに

しても咽喉が火のやうだ。

井戸は無えかな、井戸は……やむ事を得なけりやあ、さき程のあの高札場の屑屋の這ひ出した井戸まで引返すかね。

斯うして、此の門前をうろつき出した、やくざ野郎は、程なく代官屋敷の裏門の堀井戸の處へ姿を現はした事を以て見ると、求むる處のものに同時に有りついたやうなものです。

### 五十八

宇都木兵馬が、此處へ来てから、一つ氣になるのは、お代官の邸の奥向のことです、このお代官には女房は無くて、お氣に入りのお妾が、一切を切つて廻してゐることは、それでいゝとしても、兵馬が氣になり出したのは、このお妾がいかに水つぽい女で、たしかにいゝ女といふのだらう、血相のいゝ顔につやく／＼しい丸鬘を結つて出入の者や下々の者まで反らさない愛嬌はたしかにあつて、代官が寵愛するもの、のろいばかりではない、まあ、この妾にも寵愛を受けるだけの器量はあるのだ。この奥向を切つて廻して、主人丸

めて置くだけの器量のある女には相違ないが、兵馬が氣になり出したのは、品行の悪い噂で、それも噂だけではない、兵馬の眼にも、それと合點の出来るほど、眼に餘る處も見えないではないが、兵馬のわけて氣になるのは、どうも自分に向つてまで、眼の使ひ方が解せないことがある、それが、日一日と強くなつて、あの火事の騒ぎの晩なぞは、——兵馬はその晩のことを思ひ出していよく變な氣になりました。

このお部屋様が、自分に誘惑をやり出してゐる、といふことが、ハッキリわかつて來ると全くイヤな心持です、ただ、イヤな心持ではなく、二重にも三重にも、イヤな心持がするのには、自分の外にこゝに召使はれてゐる誰彼の用人、小姓、皆んなあれと同様の色目にあづかつてゐるらしいからで、さうして自分が新らしくて珍しいものだから、特別に——といふ思はせぶりがたつぶりだからです、つまり斯うして、自分をおもちやにして見ようといふいたづら心なのだ、さうして、そのおもちやになりつゝ、表面は至極心服の態に見せてゐるものが、現にこの邸の中に一人や二人はあるらしい、それでも、お互達のうちに相當も起らないし、お代官そのものも一向悪い顔をしなないのは、お人好しで全く氣が付か

ないのか、或は自分が相當の食はせ者であるだけに、氣がついても見て見ない振をしてゐるのか一方から云へば、それで風波を起さずに抑へてゐるところは、どこかにあの女の度胸だとも器量だともいへないことはない。

だが、度胸にしても、器量にしても、それは浅ましいものだ、兵馬には感ぜずには居られません、さうしてその浅ましさが、今は一圖に自分の方へ向つて壓迫されて來ることを感ぜずには居られないのです。

一日も早く此の地を立ち去つた方がよいと思つてゐる一方に、またあのお代官の引力が何となく強い、あのお代官はお代官でまた極力、この自分を引き留めて置きたい見が充分にある、その了見を露骨にしないで、搦手からジリジリと待遇を持つて、自分を動かさないやうにして、手許へ引きつけて置きたいとの了見がよくわかつてゐる、兵馬は、それをいゝ加減に振りきつて、出立せねばならぬと思ひつゝも、その待遇にいいほだされてしまふ、何も特別の義理はないし、人物に對しても、さう離れられないほど尊敬も心服もしてゐるのではないが、このお代官にある力で引きつけられて急に腰を揚げられないやうな氣

持にされてゐるのが不思議だ。

お妾の色目とそれとは全く別なことはわかつてゐる、何も自分を引留めて置きたい爲に、示し合はせて色仕掛けの何のといふたくらみになつてゐないことは確だが、何にしてもこの二つが左右から當分自分を動けないものにしてゐるらしいことは争へない。兵馬は寢返りを打ちながら、こんなことを考へてゐるうちに廊下がミシと鳴るのを感じました。

## 五十九

「あゝ」

そこで 兵馬は胸が燃えるやうな熱さを感じました。

あゝ、それ、今も氣にかゝり、その人が、今晚といふ今晚、こゝまで忍んで來られたのだ、

あゝ、正直の處、自分はこの誘惑に勝てるだらうか。

あの奥方——ではない、お部屋様、あの婦人が此處へ入つて來たら、どうしより、聲を出

して恥をかゝせるわけにも行くまい、さうかといつて……

あゝ、困つた、絶體絶命、兵馬は、もう全身が熱くなつて、ワナ／＼とふるへが來てゐるやうです。

果して、ミシ／＼と廊下に音が續いてする、中の寢息をうかゞつてゐるものらしい、あ、障子の棧へ手をかけた。

どうしやう、この誘惑に勝てようか、勝てゝも勝てなくても、今は絶體絶命だ、斯う云ふ時に、兵馬はいつも堅くなつてしまつて動きの取れないことが可笑しいほどです。

兵馬には、來るものを取つて食ふだけの勇氣はない、さうかと云つて、それを叱り誠に恥をかゝせて追ひ返すほどの非人情も發揮が出来ない。

禪の心得とか何とかいふものが、こんな時に、さつぱり役に立たないのは、却て、なまじいにそれに引かゝるからだ——兵馬はある先賢が旅宿で主婦から口説かれたのを平然として説得して返したことを思つて見たり、美人から抱きつかれて、それを枯木寒巖とか何とか云つて、このなま／＼坊主奴と追ん出されてしまつた事を考へる。

突いていゝのか、引ばり込んでいゝのか、實際、禪だの心法だのといふ事を少し學んでゐたゝめに、却てそれに迷ふ。

果して、隔ての襖が細目に開く。

是非なく兵馬は、ムツクリと起き直つて、蒲團の上に端座しながら枕元の燈心を掻き立てました。

兵馬が燈心を掻き立てた途端のこと、その行燈の下から、ぬつと這ひ寄つた人の面、それとびつたり面を合せた兵馬が、

「あ！」

と云ひました、驚いたのは兵馬のみではなく、その行燈の下から這ひ寄つた面の主も同じやうに喫驚して、

「いけねえ！」

途端に早くも兵馬は、この者の利腕を取らうとして、案外にもそれがフワリとして手答へのないのに、ハツとしました。

これは雙方の思惑違ひ、勘違ひでした、兵馬が行燈の下から見た面は、豫想してゐたやうな人ではなく、全く見なれない月代さかやきのならずものめいた、色の生白なまじろうい奴！ その色の生白こいまい小粹こいざがつた方が認めたのは、やつぱり案外な若い男の侍でしたから、双方共一時全く當が外れて、度を失つたものです、でも、兵馬は心得て、矢庭に、その曲物の利腕を取つて押へようとして、再び案外に感じたことは、それにさつぱり手ごたへの無い事で、つまり、此男は、手を引込めて、兵馬の打ち込みを外したのではなく、その利腕がてんで存在してゐないのだといふことを、兵馬が覺りました。

右腕は無いのだ、それならばと、膝を立て直して抑へにかゝつた時先方もさるものでした。さつと、引くり返つて、これは、ワザと引くり返つたので、その引くり返つた途端に、行燈を蹴飛ばして眞ッ暗にし、なほ二の矢に行燈の下から素早くさらつた油壺を兵馬のあたりを目掛けて投げつけると、クルリ起き直つて、廊下へ飛び出してしまひました。

勿論、こいつは、がんりきの百藏で、噂に聞いた新お代官の屋敷の好者すきもののお部屋様に見參するつもりで來たのが案外にも、宇津木兵馬の寢て居る處でした。

六十

その素早い舉動には、さすがに兵馬も呆れる程でした。

此奴、本職だ。

直ちに刀を取つて追ひかけたが、庭へ逃げたといふことを知ると共に、自分は庭へ下りないで、道場へと進んで行きました。

道場には黒崎君が寢てゐる。

兵馬は靜かに黒崎を起しました、さうして、今、曲者が入つたことを告げ、但し單身潜入したもので、大體に於て、深いたくらみのある奴ではないから、騒がないが宜しい、強いて陣屋の上下を動搖させるほどの事もあるまいから、君は起きて、屋敷の内部を警戒し給へ、拙者は一廻り邸外を廻つて見て來る、二人だけで分分してしまはう、騒がないがよいと云ひました。

黒崎はそれを心得て、身仕度をしました。

兵馬は、それから小提灯をふところに入れ、戸締りをして置いて、さいぜんの曲者が乗り越えた塀に近い潜り戸から、邸の外へ出て見る気になりました。

可なりに広い、代官邸の塀の外を一廻りするだけでも可なりの時間を要するが、内部のことは黒崎に任せて置けば心配なし、實は自分もこの機会に少し外へ出て見たくなつたのだ。高山へ来てからまだ、夜歩きといふことを兵馬はしてゐないので、夜歩きが好きといふわけではないが、深夜街頭を歩くことには、京都以來、いろ／＼の興味も持つてゐる。何かと得る處も甚だ多いのです。——第一、夜は静かで紛雜の氣分を一掃する、それに思はぬ事件や思はぬ人物に出會して、何かの意味でそれをあしらうことが、なか／＼修行になるものだと思つてゐる、それにまた兵馬も若いから、おのづから若い血汐が夜遊びといふことに誘導するといつたやうなせいもあらう。

そこで兵馬は、今晚、たゞ單に塀の外を通るのみではない、また、たゞ今、取り逃した小盗をどこまでも追ひつめるといふのではなく、今晚は一つ、この機会に、少し高山の町、それとあの焼け跡の邊までのして見ようではないかといふ氣分に唆られました。

と云つても、高山の町は、そんなに廣くないから、随つて多くの時間をとるほどのこともあるまいし、あとの處は黒崎に任せて置く、黒崎はなか／＼出来るから、あれが眼を醒ましてゐてさへくれれば、あとの留守は心配がないといふものだ。

それにまた、兵馬は、當時、宗猷寺に移つてゐる高村卿の處へもお寄り申してくるつもりでせう、さうなれば、夜明けになるかも知れない。

斯うして、兵馬は邸外の人となりました。

飛驒の高山の夜の景色に悠々とひたつて見る機會を得ました。

塀外を一廻りして、それから、右に川原町、左に上向町を見て、眞直ぐに出て行くと、そこに中橋がある。

中橋は、京の五條橋を思ひ出させる擬寶珠ぎぼし附の古風な立派な橋で、宮川の流れが潺湲せきけんとして河原の中を縫ふて行く、その沿岸に高山の町の火影が眠つてゐる、南にはこんもりとした城山のつゞきと、錦山、此處へ立つと兵馬はどうしても「小京都」といふ感じをとどめることが出来ません。



飛彈の高山には「小京都」の面影があるといふことは、丁度、この橋が五條の橋で、三條四條を控へ、この川が鴨川そつくりの情趣を湛へてゐないではない、この城山つゞきを東山一帯に見做すことも決して無理ではない、無論、京都の規模には及ばないが、その情趣の髣髴は無いではない、それに京都は天地こそ、やはり平安の気分はあるが、時は凄まじい渦に巻かれてゐることを兵馬は見てゐるが、こゝは、本場のやうな血なまぐさい事は無いから、斯うして歩いてゐても、途上に人間の首がころがつてゐたり、壯士が拔身を持つて横行して來たりするやうな心配はない。

たゞ、氣の毒なことは、過日の火事である、不幸中にも、代官邸以西まで火は届かなかつたが、宮川通りから一の町二の町、三の町、川西の方までも目抜き之處が焼かれてしまつてゐる——兵馬としては、この城山の方奥深く上つて、高い處から、更に深夜、むしろ夜明け間近の高山をもう一べん見直さうとしたのですが、火事場見舞を先きにしてやらうと、

中橋を渡りきつて見ると、もうやがて焼跡の區域で、そこへ至る前に、再び足をとどめたのは、例の、今の高札場の、柳の木のある處です。

そこまで兵馬がやつて來た時に——無論、この高札場が、もう一度前に一場出てゐて、それが返し幕か、廻り舞臺になつてゐて、今度はそこへ自分が一人だけ登場せしめられてゐるといふことを、兵馬は知らないのです、ですから何氣なく、その場面へ登場して來て見ると、その前路のまん中に、自分よりは先に、もう一人の役者が登場してゐることに驚かされました。

高札場を中にして、自分とは半町ほどの距離を置いて、大道のまん中に、人が一人倒れて苦しがつてゐることが、兵馬には直ちに氣取られてしまひました。

そこで、心得て、踏みとどまり、その道のまん中で苦しむうめいてゐる者の何者であるか——無論、それは人間には違ひないが、人間の如何なる種類に屬してゐるもので、如何なる理由で、今頃あんな所にあつてゐるのか、倒れてゐるのは、事實あの人影一つだけで他に連類は無いのか、なんぞといふことの觀察には、可なり兵馬は抜け目が無いのです。

幸にこの柳の木——これは、この前の場面が、いり、き、百といふ役者が、充分カセに使つた道具立なのですが、こゝにも兵馬の爲に有力な合方となつて呉れます。

兵馬は、柳の蔭から透して、大道で倒れて苦しがつてゐる者の、仔細な觀察を続けようと思つて、

だが、まづ以て安心な事には、この怪しい行き倒れが、斬られて横はつてゐるのではなく、酔ひ倒れて、身動きもならない程になつてゐることに氣がついたのです。

「酔つばらひだな」

酔つばらひならば、酔のさめるまで地面に寝かして置いた方がよい。

此地では、あんなのを、通りがたれものりに様物にして、さいなんで行く奴もあるまいし、まだ當分車馬の蹄ひづめにかゝる心配もあるまいから、間もなく夜が明けたら誰か處分するだらう、そのうちには酔がさめて、自分の酔體は自分で始末するに相違ない。

先づ安心——といふ氣持で柳の木から出て、さうして兵馬はづかづかこの酔つばらひの前を通り過ぎやうとしました。

「もし、そこへ誰れか來たの、何とかして下さいよ、もう動けない、助けて下さい」

兵馬の足音を聞いて、酔つばらひが呼びかけたのは不思議ではないが、それは女の聲で、助けて下さいといふけれども、酔つばらひであることは間違ひないから兵馬はさう深刻には聞きません。

本性のたがはぬ生醉なまよひ、人の來る足音を聞いて、それを見かけに、何かねだり事をでも云はうとする横著な奴！ しかもそれが女と來ては言語道斷だと思ひました。

## 六十二

恐らく、醜いものゝ骨頂は、女の酔つばらひです、微燻を帯びた女のかんばせは美しさを加へることがあるかも知れないが、斯うグデン／＼に酔つばらつてしまつて、大道中へ踏んぞり返つてしまつたのでは、醜態も醜態の極、問題にならないと、兵馬が苦々しく思ひました。

兵馬でなくても、それは苦々しく思ひませう、同時に、こんな苦々しい醜態を、たとへ深

夜と雖もこの大道中にさらさねばならぬ女、またさらしてゐられる女は普通の女ではないといふことはわかり切つてゐる、つまり、煮ても焼いても食へない莫連者ばくれんものであるか、さうでなければその道の所謂玄人といふ奴が盛りつぶされて、茶屋小屋の歸りに、こんな醜態を演じ出したと見るより外はないのです。

兵馬が近寄つて見ると、それは醜態には醜態に相違ないけれど、醜態の主たるものは醜人ではありませんでした、寧ろ美し過ぎる程美しい女で、その美しいのをこつてりとあでやかに造つてゐる、それは藝妓げいしやだ、年も若いし、相當の賣れつ妓かになつてゐる藝妓——と兵馬は一時その姿に眼を奪はれて、

「どうか、なされたかな」

「やつと、こゝまで逃げて來たんです、もう大丈夫」

「何處から」

「清月樓せいげつろうから」

「清月樓といふのは」

「お前さん、飛彈の高山にゐて清月樓を知らないの」

「知らない」

「随分ボンクラね」

「うむ」

「ほら、中橋の向ふに大きなお料理屋があるでせう、あれが、清月樓といつて、高山では第一等のお料理屋さんなんです」

「さうか」

「さうかぢやありません、高山にゐて清月さんを知らないやうなボンクラでは決して出世は出来ませんよ」

「うむ——そんな事は、どうでもいいが、お前は清月樓の藝妓なのだな」

「否え、清月さんの抱えではありません、これでも新前しんまへの自前じまへなのよ」

「なら、お前の家うちは何處だ、こんな處に女の身で、醜態を曝してゐては、自分も危ぶないし、家のものも心配するだらう」

「シウタイつて何でせう、わたし、シウタイなんて云ふものを曝してゐたか知ら、そんなものを持つて来た覚えはないのよ」

「何でもよろしいから、早く家へ歸るようになさい」

「大きにお世話様……歸らうと歸るまいと、こつちの勝手と云ひたいがね、わたしだつて酔興でこんな處に轉がつてゐるんぢやないのよ」

「これが酔興でなくて何だ」

「いくら藝妓だつて、お前さん、酔興で夜夜中よるよなかこんな處に轉がつてる藝妓があるもんですか、これには云ふに云はれない切ない入いわけがあつての事よ、察して頂戴な」

「困つたな」

「全く困つちまつたわ、どうすればいゝんでせう」

「いゝから、早くお歸りなさい」

「どこへ歸るのです」

「家へお歸りなさい」

「家へ歸れる位なら、こんな處に轉がつてゐるものですか」

「では、その清月とやらへ歸つたらいゝだらう」

「清月から逃げて歸つたんぢやありませんか」

「何か悪いことをしたのか」

「憚りはばかりさま、悪いことなんぞして追ひ出されるやうなわたしとは、わたしが違ひます、あのお代官の親爺に口説かれてどうにもかうにもたまらないから、それで逃げ出して來たのを知らない？」

## 六十三

「なに、お代官がどうした」

「知つてる癖に、そんなことを今更尋ねるなんて野暮らしい、今晚もわたし、清月ですつかりあの助平のお代官だいくわんに口説かれちやつた」

「……………」

「わたしを呼んで、こんなに盛りつぶして置いて、今晚こそヂタバタさせないんですとさ」  
「ふーむ」

「感心して聽いてゐるわね、あなたはどなたか知らないが、おとなしい方ね、あなたの様におとなしければ何にもないんですけれど、あのお代官と来た日には……助平で、安本丹で、しつこくて、音齋で、傲慢で、キザで、馬鹿で、阿呆で、小汚なくて、あゝ、思ひ出しても胸が悪くなる、ペッ、ペッ」と唾を吐きました。

兵馬は重ね々、苦々しい思ひに堪へられないのです。

もう、これだけで、委細は分つてゐるやうなものだ、問題の今の新お代官、詰り、假りに自分が逗留してゐる處の主人が、この藝妓に目をつけて、ものにしようとしてゐる、昨晚も、宵のうちから手込めにかゝつたが、それが思ふやうに行かないからこの仕儀、兵馬は新お代官に就ては、絶えずこんな様な、聞き苦しい噂や事實を見たり聞かせられたりする單にそれだけによつて判断すると、新お代官なるものは箸にも棒にもかゝらない、悪代官

の標本のやうに見えるけれども、兵馬自身は決して、それは敬服も心服もしてゐないけれども、接して見てゐるうちには、さう悪いところばかりではない、野卑ではあるが何處か大量な處があつて、相當に人を籠略する魅力愛嬌もないではない、人の蔭口は一方をのみ聞き捨てにすべきものではないといふことをこの邊にも経験してゐたのでした、が只今、この場のこととはありさうなことで、藝妓風情に口説いてハネられて、逃げられて、その上に助平の安本丹のとコキ卸されば世話はないと思ひました。これでは、たとへ人物に面白ところ有らうとも無からうとも、假りにも、飛驒一國の代官としては權威が立つまいと心配させられるばかりです、だが、この藝妓といふ奴も生意氣だ、代官の權威にも屈しないなら屈しないでいゝが、假りにも土地の權威の役人を、こんな風に悪口雑言するのは怪しからぬ、併しこれも酒がさせる業、和めて酔をさましてやる外には仕方はなからうと思ひ、

「代官も悪からうが、お前も品行がよくない」

「まあ、御親切さま、藝妓の品行を心配して下さるあなたといふ人は日本一の親切者、わ

たしあなたのやうな人が大好き、あなたとならば、一苦勞も二苦勞もして見たいわ」といつて藝妓が、いきなり兵馬の首にかちりつきました。

その道の達者の、抑へ込みならば外して外せない事はないが、このかちりつきには、むざ／＼と兵馬が引か／＼してしまいました。

「何をするのだ」

それでも、火の子がついたやうに、やつとその細い腕を振り拂つてゐる。

「それでは歸るから送つて頂戴な」

「うむ」

「送つて頂戴、ね、またあのお代官の助平が出て來ると、今度はわたし逃げられないから」

「よし」

「送つて下さる」

「家は一體何處なのだ」

「少し遠いのよ」

「遠い」

「えゝえゝ少し遠いけれども、あなた本當に送つて下さい」

「已むを得ない、行きが／＼り上」

「行きが／＼り上なんて云はないで、親身しんみに送つて頂戴な、でも、行先ゆくさきが少し遠いのよ」

「何處だか、それを云ひなさい」

「信州の松本なのよ」

## 六十四

信州の松本と聞いて、兵馬が再びこの藝妓の面を見直さないわけに行きません。

送れと云ふから、行が／＼り上、送つてやらねばなるまい、廣くもあらぬ高山の土地、たとへ今は焼け出されて、立ち退きになつてゐるにしてからが、知れたもの——歸りがけの駄賃——にもならないが、まあ斯うなつては退引しないと觀念したもので、「信州松本」と聞いて呆れました。

「ね、信州の松本まで送つて下さらない？」

呆れながら兵馬が、

「松本の何といふ處だ」

「松本の淺間のお湯てのがあつてせう、あそこよ、だが待つて下さい、うつかり行かうものなら、その松本もあぶないことよ、網を張つてある處へ、わざ／＼引かゝりに行くやうなものだから、もう少し考へさせて下さいな……さう／＼では、同じ信濃ですけれども、もつと山奥の、中房なかぶさの湯ゆ、あそこへ行きませう、中房ならば誰れにもわかりつこなし」

「うむ」

「もし、其中房で見付かつた時には、お江戸へ連れて行つて頂戴な」

「あゝ」

「どうしました」

「あゝ、お前は此處にゐたのか」

「此處にゐたとおつしやるのは」

「お前は松本から中房へ行つて、また中房を出た筈だが……」

「その通り、違ひありません」

「それが、どうしてこんな處へやつて來たのだ」

「どうしてつて、あなた」

「お前は、江戸へ歸りたいといつてゐた筈だ」

「それが間違つて、飛驒の高山へ來てしまいましたのは、悪いおさむらひに騙されて、さ／＼からかはれた揚句に、この高山へ納められてしまいました」

「その悪いおさむらひといふのは佛頂寺と丸山だらう」

「何と仰言るか存じませんが、あの二人のお方が、江戸へ連れて行つてやると仰言つたのに騙されて、この高山へ來てしまいました」

「そんなことだらうと思つたから、急に後を追ひかけて見たのだが」

「そんな事とは、どんなこと」

「お前は、わしがわからないな」

「まあ、どなたでゐらつしやいましたか、お見外れ申しました、お面を見せて頂戴な」  
この時分には、ツブ醉が多少醒め加減になつてゐたと見え、

「ねえ、あなた、あなたの御親切は死んでも忘れませんよ、お面を見せて頂戴な」

女の方から、もたれかゝるやうに來たのは、相手が怖るべき助平野郎でなく、多少共に、自分を親切に介抱して呉れる人だとの意識が明瞭になつたからでせう、兵馬の首に抱きついて、自分の面をそこへ持つて行つて、充分に甘つたれるやうにシナをしながら、トロリとした醉眼を見張つて、さうして兵馬の面を見定めようとする努力を試みてゐる。

「しつかりしろ」

「しつかりしてゐますとも、まあ、あなたまだお若い方なのね」

「しつかりしろ」

「頼もしいわね、おや、まだ前髪立なのね、お若いのもいゝけれど、子供ぢやつまりませんわ、早く元服して頂戴な」

「いゝ加減にしろ」

兵馬は、女の脊中を一つ打ちのめすと——そんなに強くではなく——女は

「まあ、痛いこと」

仰々しく云つたが、この時、酔ひは著しく引いたと見え、腰をまとめながら起き上り、

「まあ——失禮いたしました。こゝは何處でございませう、あなた様は見たやうなお方……

……いつ、わたしはこんな處へ……まあ」

## 六十五

正氣がついて來ると、グン／＼回復するらしい、回復して來ると、左様な商賣人とはいへやつぱり、女の羞恥心といふものが一番先きに目覺めて來るらしい、自分の膝や裾の亂れたのが急に取うつくろはれて、さうして次には、こんな醜態を演じてゐた自分といふものに愛想をつかす。同情をもつて介抱して呉れた人の親切といふものに、何事を措いても感謝しなければならぬといふ念慮が動いて來るのも自然です。

その自然と雁行して、この藝妓が、この暗い中で氣がついたのは、現に介抱して呉れてゐる



るこの人が、どうも以前に面馴染のあつた人と思ひ出して来た瞬間、まだ前髪姿の武家出の少年であるといふことを知つて、中房なかぶらよりの道中の道連れみちづれの、親切か無情かわからない少年のことでありました。

「もしや、あなた様は」

と云つた時、兵馬が透かさず、

「どうだ、わかつたか」

「わかりました」

「まあ、お前も無事でよかつた」

「無事と仰言れば、無事には違ひないかも知れませんが、こんな無事では何にもなりません」

「佛頂寺、丸山はあれからどうした」

「どうしたかつて、それはお話になりません、あなたもお聞にならない方がようござんせう」

「うむ、あの兩人のことだから」

「否え、あの御兩人ばかり悪いのぢやありません、もつと悪い人があります」

「それは誰だ」

「あの時に、どなたか知りませんが、物臭太郎のお茶屋に、狸寝入りなんぞきめ込んでゐらつしやつたお方がございましたね」

「うむ」

「そのお方が、もう少し親切にして下されば、わたしも、こんな處へ来て、こんな生恥いきはぢを曝さらさなくても済みましたのに」

「うむ——」

「随分、あの方は若い癖に薄情なお方でした」

と云ひながら、女は兵馬の胸に面を伏せました、これは、最初にしたやうな、巫山ふざん戯たはれ心持ではなく、何となく痛々しいものがあるやうで、兵馬も無下むげに振拂ふ氣持にはなれませんでした。

「中房なかつぶらを逃げて出る時、いゝ月夜の晩でございました、旅に慣れたその若い方は、ずん／＼進んで行つておしまひになる、草鞋なんていふものを、生れてはじめてあの時につけたばかりのわたしといふものは取り残されてしまひましたね」

「その時の事情、やむを得ないからだ」

「それは、やむを得ないには得ない場合なんでせうけれど、あの懸命な道中で、足の弱い女だけ一人残されたら、落ちるところは大抵定まつたものです——わたしは薄情な若いお方より、悪人でも、助けてくれる人に縋つた方がよいと思ひました、さうしなければ、わたしは生きられなかつたといふ次第なんでしてね」

と云ひながら、兵馬の胸に伏せた面を上げて、まだ醒めきらないほろ酔ひの足どり危なく、二足三足歩き出しました。

「歩けるか、では、家まで送つて上げやう」

「否え、それには及びません、外ほかの方ならば兎に角、あなたには中房の道中で立派に捨てられたんです、これでも、まだ捨られた人のお情に縋つて生きやうとは思ひません」

女はまた二足三足、ふら／＼と歩き出す、兵馬は、それを見てみると、女は急にふり返つていふ

「ねえ、あなた」

「何だ」

「一度、わたしを招んで頂戴な、あなたのやうな薄情な方にも、商賣だから、わたし、いくらでも招ばれて上げるわ……」

と云ふ途端に一方に於て意外な物音が起りました。

## 六十六

それは何者とも知れないが、二人が斯うして話してゐる間、つひ、後ろの高札場の石垣の蔭に隠れてゐた者が一人あつたのです、この隠れてゐた奴は、どうも二人か或は二人のうち一人を狙つて危害を加へやうとしてゐたものではなく、寧ろ二人のゐることを怖れて、早く事件の解決がつけばいゝ、その解決がついて、二人が此處を立ち退いた後に、自分の

身を處決しようが爲に、息をこらして、こゝに潜んでゐたものと見えました。

ところが、この女の酔の醒めることが容易ではなく、この酔のうちの管くだがあんまり長いのに、介抱する若いさむらひも可なり親切に、酔のさめるのを待つてやつてる、酔が漸く少しばかりさめかゝつてから、また後の痴話が相當に長い、さうして、女は、何か男に恨みのやうなことを云つて、そのしどろもどろの足どりで、あなたのお世話にはならない、自分一人で行くなんぞと思はせ振りをしてゐる、そんな手管や思はせ振りも、御當人同志のお安くない間だけの事なら御勝手だが、後ろに隠れて早く自分の身の振り方をつけやうと焦つてゐる者の身になつてはこらへられない。

そこで、今、堪へ兼ねて、石垣の後ろからけたましましい音を立て、飛び出したのは、無論二人を威嚇する爲ではなく、そのまゝ一目散に、羽ばたきのけたましましい音を續けながら二人の間を割つて、あらぬ方へと逃げ出して行くのです。

それが二人を驚かしたことは無論です、女の方の思はせ振りの所作も、それで立ちすくみになつたが、兵馬としては、驚いて狼狽するのみではゐられません、直ちにこの怪しい奴

を引き捕へて見なければならぬ必要に迫られました、そこで、

「待て！」

と、自分も宙を飛んで、それに追ひ纏つたものです。

「お赦して下さい、怪しいものではござりませんで」

「怪しいものでなければ、何故逃げる」

「意氣地の無い人間でござりますから逃げやんした、おゆるし」

「赦すも赦さんもない、お前が怪しいものでさへなければ逃げる必要もないのだ、こちらもお前が逃げさへせねば捕へはせぬのだ」

兵馬は瞬く間に追ひついて、この怪しいものを膝の下にねぢ伏せて動かすまいとしたが、同時に氣のついたのは此奴がグシヨ濡れであることです。

「おゆるし下さい」

「一體お前は何者だ」

「私は層屋でござります」

「屑屋？」

「はい、紙屑買ひでございます」

「紙屑買ひ——商賣とは云へ、時刻が早や過ぎる、それにお前の身體はぐしよ濡れだな」  
 「ちよつと、早出する用事がございまして、これへ通りかゝりますとあなた様方が、こゝにお見えでございましたから、避けようとして溝へ落ちましたので、遠慮を致して隠れて居りました」

「そんなに遠慮することはあるまいに」

と云ひながら、兵馬は篤と見ると頭から著物をつくりぐしよ濡れになつてはゐるが、御膳籠は放さない、どう見ても紙屑買以外の何者であると思はれません、成程、早立をしてこゝへ来ると吾々の物言ひを見て、物蔭に避けてゐたのが、痴話が長いので、堪へ兼ねて飛び出したのかも知らん、さうだと思へば、さうも受け取れる、それにしても、怪しいといへば怪しいと思はれる。

そこで、兵馬は抑へながら、懐中へ手を當てゝ見て

「何も持つて居らん」

「この通り、仕入れの財布だけでございます」

「さうか」

撫然として、兵馬もこの者を放ちやるより外はないと決めた時、一方の柳の木の方で女が

「おや、あなたはどなた」

と云つたのが兵馬の耳には聞こえませんでした。

## 六十七

兵馬が、紙屑買を糺問してゐる事の瞬間、後ろの女のごとは暫く忘れて居りました。忘れて置いても安心といふ處まで、介抱が届いてゐたからではあるが、この怪しの者を最初から屑屋なら屑屋と見定めてかゝれば何のことはなかつたのですが、事の體が、充分に嫌疑を置くべき舉動でしたから、多少の手續を以てしても突きとめるだけは突きとめねばならぬ成行に迫られたのです。

さうしてゐる間、例の後ろの高札場と、その傍へなる齒の抜けた老女のやうな枯柳が、立派に三杯目の役をつとめました。

柳の後ろに人がゐたのです、それはいつ頃から來てゐたか、よくわからないが、兵馬に介抱された藝妓が、

「いくら藝妓だつて、あなた、酔興で夜夜中よるよなかこんな處に轉がつて居る者があるものですか……云々」

と云つてゐた時分から柳の蔭がざわ／＼としてゐました。

それからは、全く動かなかつたのですが、バサ／＼と御膳籠の音がして、足許から飛行機が飛び出した様に、屑屋が、この情にからんだ氣流を攪亂して行つて、兵馬が射空砲のやうにその後を追ひかけた時分になつて、そろ／＼と柳の木蔭から歩み出して來たのは、覆面をして竹の杖をついたものです。音を成さない足どりで、鮮かに歩み寄つて、思はせ振りの芝居半ばで、相手を浚はれテレ切つてゐる藝妓の後ろへ廻り、肩へぬつと手がかゝつたと見たものですから、女が氣がついて、

「おや、あなた、どなた……あのお若いおさむらひ様のお連れなの」と云つたけれども返事がありません、酔つてさへゐなければ、もつと強調に怪しみと驚きの表情をしたのでせうが、たつた今漸く醉線を越えたばかり、まだ酔と醒の境をうろついてゐた女には、それほど世界が廻つてゐるとは見えなかつたらしく

「お連れさんでせう——そんならさうと仰言ればいゝに」

甘つたれる調子で、暫くあしらひ、後ろへ置かれた手をもちつとも辭退しないで、寧ろわざと後ろへしなだれかゝつて、芝居半ばにテレきつた自分の身體を持ち扱つてもらひ度い素振りをしたが、それをそのまま底へ引き込むやうに受け入れ、肩へかゝつた手が、胸へ廻り首を抱きました。

「くすぐつたい」

後ろの人は一切無言でしたが、女は、わざと身悶えをして、

「くすぐつたいわよう」

だが、女はその擽つたさ加減を遁れやうとしないのに、後ろの人は緩和しやうともしない

「まあ、痛いわね」

女は、またわざとらしい悶え振りをする。

「だんぐくに強くなつたのね、物凄いわ」

これもいゝ心持で、するやうにさせての女の云ひ分です。

「まあ、擦くるんぢやなくて、締めるの」

その時に、後ろの者の面がグット女の頬先きまで來ましたから、女はしなをして首を横へ、捻ぢ向けた途端、

「おや……」

女は後ろの人の面を見ようとして、覆面に隠されたそれを見得なかつたのでせう、怪しみの聲が、急にうめきの聲に變りました。

「あ、本當に、わたしを締めるのですか、く、く、苦し……」

大きな蛇が、すつかり、この女の首を捲ききつてしまひました。もう、何の冗談も、持たせかけもありません、大蛇おろちの火を吐くやうな息が女の頬にかゝるだけです。

宇津木兵馬が、屑屋を放免して、さうして、柳の木の下に立ち戻つた時に、その女はそこにゐませんでした。柳の木の蔭にも無論誰れも居りません。

## 六十八

屑屋を突つ放した宇津木兵馬は、以前の處へ戻つて見ると、そこに以前の女が居りません、柳の木の蔭にも、高札場の石垣の後ろにも、見渡す限りの焼野原にも、何れにも、人の影を見ることが出来ませんから、一時は夢の中の夢ではないかと、自ら怪しみました、ふむあの氣紛れ者が僅かの隙にずらかつたのだな、千鳥足でフラ／＼とさまよひ歩き結局は自分の家か、例の清月とか何とかへでも納まつたのだらう——取りとめのない奴だと呆おきれながら兵馬は柳の木の蔭を見ると、そこに何か落ちてゐる、よく見ると、それは、女の赤いゆもじとか蹴出しかいふものがずると落ちてゐる。

それを見ると兵馬は、實に度し難い奴は女だと思ひました、女であり、酔つばらひで、ることによつて、こちらが讓歩して、あれほど世話を焼かせてゐるのに、漸く醒めて、獨り

歩きが出来るやうになれば、お禮は愚か、挨拶の一言もなくして、行き度い處へ行つてしまふ、かういつた奴は、あの女には限るまいが、あんなのは殊にあゝしたもので、その圖々しさと不人情が商賣柄だ——とは云ふものゝあの女もあゝいふ商賣をして、所々を轉々させられてゐる、本當に圖々しい不人情ならばとにかく、あの若さであの纏綴だから相當に納まつてゐる筈なのに、それが出来ない、斯うしてゐる處を見ると、つまり自分が世間を翻弄してゐるつもりでも、結局世間から翻弄されて、浮草と同じことに落ちつく處が無い、事實は、あんなのが正直者かも知れない。

そこで、兵馬はゆくりなく、吉原に於ての過去の夢を思ひ出し、悔恨の念と共に、あの時の相手がこゝに現はれた女と、境遇は略々同じでも、行き方の全く違つたことを考へずには居られません、この女の、斯うして落ちつきもだらしも無いのに引き換へて、今考へて見ると、あの吉原の女は賢明といふものかも知れない、朝夕坐つてゐて客をあやなし、客のうちゝの爲になりさうなのを捕へて、何のかんのと云ひながら、そこへ納まつて、かなり完州に一生涯の生活の保證をつけてしまふ、その間に親へ仕送りをもすれば、役者買ひの費

用をも産み出す、今晚現れたあの藝妓だつて、それだけの打算と手管がありさへすればこんなだらしない事にはなるまい、なまじい意地があるとか、涙もろいとか、何とかいふことで、抜けられず、深みにはまつて行つて自暴が自暴を産み、いよく抜きさしのならぬ處へ進んで行くのではないか、さうだとすれば實は氣の毒千萬のものだと兵馬らしい同情の念が起りました。

この同情が兵馬の弱身でせう、一旦解決をしまひながら、後から同情の追加をしなければならぬ處にいつも兵馬の弱味がある、この若者はいつになつても徹底的に人を憎みきれない純良性格から脱することは出来ないらしい。

さう思つて、同情はして見ても、眼前このだらしない、ずるこけ落ちた緋縮緬の品物を見せられると、うんざりする、人のことではない、自分が嘲笑されてゐるやうな氣がする、昔、ある城將が、容易に城を出でないのを、攻圍軍が女の禪を送つて恥かしめたといふ話がある、こんなものが落ちてゐました、これはお前の物ぢやないかと云つて、あとから追かけて還付してやる氣にもなれない、兎に角、生醉本性違はずに、戻るべき處へ戻つて、

ぐつすり寢込み、明日はまた宿醉で頭がagarらないのだらう、厄介千萬な代物しろもの！是非なく兵馬は、足もとで、そのゆもじを蹴飛ばし蹴飛ばして、高札場の後ろまで蹴飛ばしてしまひました。

これは蹴出しといふものか、湯もじとでもいふのか、それとも腰巻か、ふんどしか何といふのが本名か知らないが、兵馬は、その緋縮緬のずるこけ落ちた代物を散々に蹴飛ばして置いて、その場を立ち去りました。

## 六十九

その翌朝になると、先づ兵馬は、昨晚、高山の市中に變つたことは無かつたかとの風聞を聞き度い氣持に迫られました。

黒崎君に聞いて見ると、黒崎君もあれから、邸の内は無事過ぎる程無事で、あんまり無事だから寢込んでしまつて、今、眼がさめたばかりといふやうな始末、その他、家の子郎黨、内外の出入の者からも、何も變つた事件が、出来してゐたといふやうな報告に接する

ことが出来ませんでした。

でも、昨晚のことが、何となく氣にかゝりもする、遠くもあらぬ處だから、朝の稽古前に兵馬は邸を飛び出して、昨晚のあの高札場の處まで行つて見ました。

昨晚の夜の色を、今朝の朝の色に塗り換へただけで、何の異状はありません、問題の代物はと見れば、これも昨晚、自分が蹴飛ばし、蹴飛ばして置いた通り、まだ誰人の目にも觸れないで、素直に高札場のうしろにかゝまつてゐる。

兵馬はそれを見て、再びうんざりした思ひをしながら、焼跡を通つて、宮川縁を一巡して陣屋へ戻つて來ましたが、その途中も、それとなく、街頭を注意して見たけれども、何等心に介さしはさむべきものを認めることが出来ませんでした。

同じ朝、相應院にゐたお雪ちゃん——これも昨晚よく寢られたから今朝は早く起きましたさうして、何かと朝の食膳の仕度にとりかゝりましたが、水を汲まうとして手桶をさげて外へ出ると例によつて、眼下には高山の町、宮川の流れ、右手が遠く開けて、さうして雪



をかぶる山々。

あゝ、加賀の白山！

お雪ちゃんの手桶を置いて、その連々たる雪の白山々脈の姿に見とれてしまいました。

どうしたのか、お雪ちゃんはこの頃、加賀の白山といふものに引つけられてゐる。「白山の名は雪にぞありける」といふ古歌が好きになつて、もう口癖のやうに念頭に上つて来る。

「白山の名は雪にぞありける」といふのが、丁度自分の呼び名とびつたりするから、この古歌が好きになり、同時に白山そのものが、あこがれの的になつたのか知れません。

それのみではありません、夢に入る白山の山の形といふものが、神秘を開いて、お雪ちゃんにおいでおいでをしてゐるから、お雪ちゃんとしては自分の故郷へ歸るやうな氣持になつて、あの白山の山のふところにこそ、自分の生涯を托する安樂な棲處すまかがあるものだと思はれてならないのらしい、白川の流れも、白水の瀑も、白川温泉も、それから太古さながらの桃源の理想郷、平家の御所をそのまま移した平安朝の鷹揚な生活があの白山の麓のいづれかに現存してゐるやうな氣がしてならないのです。

あゝ白山——とお雪ちゃんは、子供のやうに、手桶を置いたまゝ、その白山々脈の姿に見惚れて動けないのです。

白山の白水谷を渡る時には、籠の渡しといふものがある、藤蔓を長く彼方と此方とにかけ渡し、それに同じく藤蔓を編んだ籠を下げ、人一人づゝを乗せて、この岸より彼の岸に引渡す、岸と岸との間は鳥も通はぬ斷崖絶壁で、その下は、目くるめくばかりの深谷を、白水が泡を噛んでゐる。

白山へ行くには、白水を渡らなければならぬ、白水を渡るには、籠の渡しより外は術がない、昔し、悪源太義平に愛せられてゐた八重菊八重里の二人の姉妹が、悪源太が捕はれてのち、越中へ逃げようとして、その籠の渡しにかゝつたが、追手が前後から追つたので、ついに、その籠を我と我が手で切り落して千仞の谷、底知れずの白水の谷に落ちて死んだ——といふやうな傳説。

怖いもの見たさの憧れあこがから、お雪ちゃんは、もう今から籠の渡しに乗ることに胸をとどろかせてゐる。

白山よ

白水谷よ

白水谷を渡る籠の渡しよ

安らかに、われ等を渡せ。

## 七十

それから一通り流しもとを済ましてから、お雪ちゃんは、座敷へ戻つて見ると、先づ目についたのは、衣桁にかけつばなしになつてゐた、一重ねの小紋縮緬です。

それを見ると、お雪ちゃんは、まとも、どうしても、逃れられないものがあるやうな氣分に捉はれてしまひました。

あの一重ねは、見るも淺ましいので、焼いてしまはうとして焼き損ねた品、船から此處へ越す時に捨てねばならない筈であつたのが、捨てかねたのか、捨てそこねたのか自分には分らないが、兎に角、こゝへ持つて來た僅かの荷物の中に、あの一重ねがあつたのです。

それを、縁側へ出して置くと目に止まり、座敷へ投げて置くと目にちらつくものですから戸棚へ入れましたが、それでも鼠が心配になつたのか、たうとう又衣桁へかけて置く外にせん術せんじゆつが無いやうになつて、もうこの座敷へ入る早々、眼につくといふ始末です。

お雪ちゃんは諦めました、斯うまでついて廻るのは、これも因縁といふものに違ひない、あのおばさんが、わたしの傍にゐたいとの心持があつて、此の著物にその心持が乗り移つてゐるとすれば粗末にもならないぢやありませんか。

イヤなおばさん——と通り名にはなつてゐるが、よく／＼考へて見ると、イヤなおばさんのイヤな所以がお雪ちゃんにはわからなくなつてしまふので、やゝもすれば、いゝおばさん、氣の毒なおばさん、可哀相なおばさんにまでなつて來るのです、よく世間では、坊主が悪ければ袈裟まで憎いといふが、よしイヤなおばさん、イヤなおばさんであるとしても、その記念かたみの著物までをイヤがる譯は無いぢやないの。

著物に罪は有りはしないわ——といふ様にお雪ちゃんの心が知らず識らず變化してゐましたから、その心が、この著物を焼くこともせず、捨てることもせず、著物の方でも亦、お

雪ちゃんの傍にゐたいと、聲を出してゐるやうにも思はれるのです。

最初、目をつぶつて見まいとした、このイヤなおばさんの記念かたみが、今ではお雪ちゃんにとつて、何ともいはれない懐かしみを染にじみ出させて来るやうになりつゝあるらしい。

衣桁にかけた小紋縮緬の一重ねを、こんな心持でお雪ちゃんは染々と眺めてゐましたが、同時に自分の著物を見て、悲しいといふ感じも手傳ひました、昨日まで寝巻のまんまでゐたけれども、こゝへ来て、お寺の心盡しで、娘らしい一通りの借著を著せて貰つてゐるけれども、焼かれたのがほんの一重ねだけでもあれば……と思ひやられる處へ、このイヤなおばさんの記念ばかりは、仕立て卸ろし同様に、こんなにしてわたしの眼の前にある、あのおばさんも云つた、これは私には派手過ぎる、あとから代りが届いたらお雪ちゃんにあげませう——それは冗談ではなく本心の約束のやうなものでした、事實、お雪ちゃんは、このまゝ自分が著ても、そんなに不釣合のものぢやないと思ひました。

わたし、これを著るわ、著て見るわ、と云ふ處へ進んで、お雪ちゃんの心が怪しくなつて衣桁に手をかけて見ましたが、その手を自分の帯の方へ取り替へて、帯を解き、著物を脱

いで、たうとう、イヤなおばさんの記念の縮緬の著物をすっかり著こなしてしまひました。イヤなおばさんでも、怖いおばさんでも無くなつてしまひました。斯うして著こなして見ると、お雪ちゃんは何となくそわ／＼した氣持になつて、誰れかに見せたい——といふやうなそ／＼ろ心から、龍之助の居間へ行つて見る氣になつてしまひます。

龍之助の居間へ行つて見ると、龍之助は刀の手入れをしてゐました。

落ちつきのある書院の、よい日當りを細骨の障子に受けて、あちら向きに刀の手入れをしてゐる龍之助。刀の手入れをなさることは近ごろに珍らしい事だと思ひましたが、それだけ氣分が穩かに環境が落つてゐるせいでせう——とお雪ちゃんはそれを喜び、さうしてゐる龍之助の形をよい形だと思ひました。

## 七十一

武州澤井の机の家が、この頃、急に物騒がしい空氣に驅られたやうに見えます、別に兇暴があつて、騒がしいといふ譯ではないが、いつも、しんみりと落ちついた一家の空氣に、

何となく一道の陽氣が吹き入つたかのやうに見えるのです。

第一、この女主人とも云ふべきお松が、急にはしやいだといふわけではないが、何となく動揺を感じて、心が浮き立ち、何かこゝにもある時期に達したものとやうに見えます、それといふのが、たしかに原因はあることなので、その原因といふのは、さき頃、房州方面へ行つた七兵衛親爺が、立ち戻つて来てから以來のことです。

その晩、爐の前で、數へ年四歳せしよつになる郁太郎をその巨大な膝に抱きあげてゐる興八に向つて、お松が、こんなことを云ひました。

「さう云ふわけですから、興八さん、この土地も惜しいけれども、この子供さん達の爲にどうしても、駒井の殿様のお船の方へ皆んなして移るのが、お互ひの幸福ぢやないかと思ひます、この土地の事は、この土地のことで、皆んな居つてゐる人で、わたし達は盡すべきだけのことは盡し、お互に人情づくで多少の名残はあるけれども、立ち退いた處で、人様に御迷惑をかけるやうなことにはなつてゐないから、こゝは、いつそ、わたし達は駒井の殿様の方へうつり、殿様をたよつたり、又殿様のお力になつて上げたり、それがまた

この子供さん達の將來の教育のためなんぞにも、どの位いゝか知れないと思ひます、七兵衛おぢさんなどは、大變喜んでゐて、もう自分も船住居の身分になれるなんて云つてますわたしも、話を聞いて見ると、全くわたし達の救ひの神様のお船ぢやないかと思はれません、渡しに船といひます通り、わたし達が、ともかく、今迄あんまり悪い事ばかりはしてゐなかつたお蔭で、こんな仕合せが迎へに来てくれたんぢやないかと思ひます、何しても、駒井の殿様を眞中にして、何んにも今までの約束や窮屈のない船の世界が出来て、世界の何處へでも落ちついて暮せやうといふのですから、こんな結構なことはありません。海の外によい土地があれば、そこへ落ちついてもいゝし、又歸りたければ、手前物の船でいつでも日本の國へ戻れるのですから、まるで、世界中を自家の家とするやうな生活ぢやありませんか」

お松が、お松としてはかなりハズンだ心持で云ふのを、郁太郎を抱いた興八は、黙つて物靜かに聴いてゐたが、

「うむ、さうかな」

「でも、治めて行く人が悪い人では仕方ありません、悪い人でなくとも、氣心の知れない人では、いくらすゝめられたからと云つて、大海へ出る船なんぞへ乗れたものぢやありませんが、駒井の殿様のお船でせう、それも、駒井の殿様が御自身で御工夫なすつて出来上つたお船を、あの殿様が好きな人だけを乗せて、御自分が宰領して御出帆にならうといふのですから、こんな大丈夫のことはありませんね」

「うむ、それもさうだな」

「それにまた、この小さいお子達だつて、駒井の殿様のやうなお方のお傍で教育されて行けば、出世の爲にもどの位幸福だかわかりません」

「それも、さうだらうなあ」

「善は急げといひますから、さう決心したら早くしませうよ、成るべく早く仕度をして、お暇乞をすべき處は早く濟ませ、一日も早く房州へ行かうではありませんか、明日から、その仕度にとりかゝりませうね、與八さん」

「うむ——」

與八は、じつと黙つて、暫くの間考へ込んでゐたやうでしたが、

「うむ、それは結構な運が向いて來たのかも知れねえが、おいらは……わしには少し考へえた事があるからね」

與八に斯う云はれてお松が狼狽しました。

## 七十二

いつも、お松の提言に不同意を唱へたことの無い與八、お松が案を立て、與八が實行するお松が與八に相談なしにする仕事はあつても、與八から一應お松の諒解を求めないといふことは無いことになつてゐる。

それに今晚のお松の提案は、今迄の提案中の提案で、こゝの生活に革命を生ずるとは云ふものゝ、その革命は、生木を裂くやうなものではなく、極めて多望滿々たる好轉である、すつてにとつて、天來の福音であつて、且つ、實行をして些の危げのない事をお松が信じてゐるから、それで、いつもよりは、一層の晴れ々しさをもち、與八に提言して見た

のは、無論興八も二つ返事と信じきつてゐたのに、今晚に限つて、この最良最善の提言を興八の口から假りにも不同意に類する言を聞いたのは意外中の意外でありました。そこで、お松は暫らく文句が次げなかつたのですが、やがて、

「どうして……どうして興八さん、どう考へたのです」

「どうしてつて、お松さん、本當に濟まねえが、今の話に、おいらだけは別物べつものにして貰ひてえのだが」

「別物にして、お前さん、それでは、わたし達と一緒に房州の駒井様の處へ行くのは忌やなの」

「忌といふわけではねえが、少しわしにはわしだけの考げえがあるから、別にして貰ひてえ、といつて、わしらの外の者は、お松さんの云ふ通り、本當にそれが渡しに船で願つても無えことだから、そのやうになさるがいゝだ、そのやうにしなけりやなりましたねえ、わしらだけ別にして貰ひてえといふのは、わしらには、その前から一つ願ねがをかけたことがあるだあ」

「願をかけたつて、それはどうしたことですか、何様へ、どんな願がけをしたのですか」  
「いや、何様へ何をと云ふ、目に見えた話ではねえんだ、わしらは、いつかある時期を見て、日本中を歩いて一巡りして來てえと思つてたでね」

「日本中を一巡りつて、興八さん、一人でそんなことを……」

「一人ぢやねえんだ、わしあ、この郁太郎さんをおぶつて、さうして、日本中の靈場巡りをして來てえものだと思つて、ひとりで願をかけてゐたのだから、その……さねえうち  
は船で外國へ行く氣にはなれねえのだから、丁度いゝ折だから、お松さんは皆んなを連れてその殿様のお船とやらへ行つて下せえ、わしあこれから廻國くわいこくに出かける」

「まあ」

お松は興八の言ふことに眼を圓くしてしまいました、それは、一にも二にも十にも百にも今まで自分といふものゝ提言に反いたことの無い興八が、今、自分の口から斯う云ふことを云ひ出した以上は、到底、翻すことの出来るものでないといふことを直覺してしまつたからです。

それは、頑固で片意地で云ひ出したのと違ひ、この人がこの際こんな事を云ひだしたのはもうよく／＼の深い信心か決心から、多年に醗酵されてゐたのだから、容易なものではないと、お松がそれに壓倒されたから、ほとんどあとを云ひ出すことすら出来なくなつてしまつたのです。

けれども、お松としては、この際、どうしても與八のこの決心を翻へさねばならないと思ひました。

與八一人だけを残して、自分たちがすべてこの生活を移すといふことは、情に於ても理に於ても忍べないことだと思ひました。そこで、暫く途方に暮れてゐたお松が、別の方面から與八を説きつけにかゝりました。

「そんなことを云つたつて、與八さん、そりや無理なことですよ、どうして、一人で日本中が廻れますか、第一食べても行かなかりやならず、路用も少ない事ぢやないでせうし……實際の生活と經費の問題から悟らせて行かうとしたが、與八は更に動ずるの色なく、

「えゝその事は心配無えんです、わしらはこの一本の鉈なたを持って行きますよ」

## 七十三

與八は郁太郎にかけてゐた片手を離して、帯に吊してあつた、一挺の鉈なたにさわつてお松に見せ、

「わしは、東妙和尚とうめうしやうさんから、この鉈なたを使ふことを教へられてゐる、これが一挺あれば、どうやら、物の形が人様に見せられるやうになつたから、これを持つて、彫物まじものをしながら日本中を歩いて見てえつもりだ」

「まあ……では、永い間の心がけね」

「あゝ、東妙和尚さんもさう云はつしやつた、與八、それだけ腕が出来たら、もう田舎廻りの彫物師の西行をしても食つて行けるぞい、と云はれました時から思立ちました、行く先き／＼何か彫らして貰つては、草鞋錢を下さる處からは頂き、下さらねえ時は水を飲んで旅をして見ようと、心がけてゐたですよ、お松さん、さうして、まづこれから上へ登つて大菩薩を起えて、鹽山えんざんへ行くと惠林寺えりんじといふので慢心和尚さんが、わしを待つて、下さ

る、あすこで何か彫らしておくなさるに違えねえ……それから甲州路を西行をして、信濃から美濃、飛騨、加賀の國なんといふ處には、山々や谷々に靈場がうんとござるといふ話だから、そこへ一々御參詣をして見るつもりで、繪圖面も、もう東妙和尚さんから描いて貰つてゐる」

「與八さん——お前さんにそんなことを云はれると、わたしは胸が一杯になつて、何といつていゝかわからない」

お松が咽び泣きをしてしまひました。

「なあ、會ふは別れのはじめ、別れは會ふことのはじめなんだから、歎くことは無えだね、お松さんが、東の方へ行つて船に乗り、わしが西の方へ行つて靈場巡りをしたからといつて、會へる時節になれば、またいつでも會へまさあね」

「だつて、與八さん……そんなに物事は容易く諦められるものではありません」

「わしは不人情のやうかも知れねえが、この間中から、それを考へてゐたね、どうもお松さんに相談したつて承知しちや呉れめえと思ふから、黙つて獨りでブラリと出かけてしまは

うかと思つたこともあるだがね、さうすると、登様はお松さんや乳母やがついてゐるから少しも心配はねえが、この郁坊、郁太郎さんが可愛想だと思つてね……それだつて、何もわしがゐなくても、やつぱりお松さんや乳母やが登様同様に可愛がつて下さるから、少しも心配は無えと思つてゐたが、でも、今日まで、そこまでの踏んぎりはつかなくつてゐたのを、今晚、お松さんから、こんな相談を受けて見ると、わしがこの頃の心願も言はずにやゐられなくなつたのさ」

「だけでも、與八さん、まあよく考へて下さい、今日までの事を考へて下さいよ、さうしてこれからの事と思ひ合せて見て下さいな、與八さんとわたしとは、斯うして随分苦勞もし合つて、これまでになつてゐるでせう、それを私たちだけが東へ行つて、與八さんだけを西へやつてゐられるものかゐられないものか、第一與八さん、お前さんだつて當途のな一人旅が、どんなに辛いものだか、今、この場のことゝしないで、考へて見てごらん」

「そりやあね、そりやあ、わしだつて人情といふものがあらあね、今まで世話になつたお松さんに離れたたり、こんな頑是の無え子供やなじみになつた皆さんに別れたり、それがど



んなに辛いかを思ひ出すと、あれを思ひ立つてから、毎晩、涙が流れて枕が濡れちまつたが——何でも罪ほろぼしの爲には辛い思ひをしなけりやならねえ、お釋迦様は王宮をひとりで逃げ出してしまつた、西行法師は妻子を蹴飛ばして出かけた、人情を一べん通りたち切つて見なけりや、佛の恩がわからねえ……こんなことをお説教で聞かされたもんだからわしや、どうしても一度、罪ほろぼしのために廻國の難儀をして見なけりや濟まされねえ……斯う覺悟を定めてしまつてゐたぞね」

お松はたまり兼ねて、その時云ひました。

「與八さん、お前は、何をそれほどまでにして罪ほろぼしをしなけりやならないほどの罪を造つたの」

## 七十四

お松が力を盡し、言葉を極めての説得も遂に與八の志しを諷すことが出来ませんでした。それでも、お松の方も亦、與八一人の爲に、この幸福と必然とを取り違がすわけには行か

ない人間以上の引力を如何ともすることが出来ません。

そこで、お互に泣きの涙で、お互の導かるゝ方、志す方に向はねばならない羽目となつたのは、豫想外中の豫想外で、さうして、何もそれをしなければ、直接の生命に關するといふわけではないにかゝはらず、さうさせられて行く力の前に二人が如何とも争ふことが出来なかつたのです。

翌日から、泣き／＼すべての出發の用意と、あとを整理することゝに働らきづめであります。

あとを濁さないように——といふお松の日頃の心懸は、此の際に最もよく現はれ、いつもかげのなた蔭日向のない與八の心情も亦斯う云ふ際によくうつります。

持ち行くべきものは持ち行くやうに、あとに残して、しま藏ふべきものは藏ふやうにしてゐるうち、お松が一つの葛籠つづもの中から一包みの品を見出して與八に渡しました。

「與八片身のこと」

と紙包みの面に記してある、しかもそれは先代彈正の筆に紛れもない、與八も奇異なる思

をしながら、それをほどこいて見ると、守り袋が一つと、涎掛が一枚ありました、その守り袋を開いて見ると躰の緒です、紙包の表に書いてある文字を、お松が早くも讀んで見ると、

「與八さん——これは、お前さんの躰の緒ですよ、まあこゝに生年月が書いてある、生年月ではない、何月何日、武藏野新町街道捨兒の事……與八さん、この涎掛がその時お前さんがしてゐたものなのよ、御先代様が、斯うして丹念に取つてお置きになつたのを、お前さんに見せる折の無いうちに、お亡くなりになつたものと見えます、今日になつて、これが出て來たのも、本當に因縁ぢやありませんか」

「あゝ、さうだつたか——」

與八は、染色のあせた涎掛をお松の手から受け取つて、両手で持つた儘オロ／＼と泣き出しました。

それから三日目、村人や教へ子が寄り集まつて、留別と送別とを兼ねたお日待でしたが、いづれも事の急に驚いて、泣いていゝか、笑つていゝか分らない有様です。

「末代までも、この地にゐておもらひ申すべえと思つたに、斯うして急にお立ちなされるのは、夢え見てえるやうでなんねえ」

と云つて泣く者が多いのです、こんな時に、お松は却て涙を隠す女でした、さうして一層の雄々しさを見せて人を勵ますことの出来る女でした。

「皆さん、會ふは別れのはじめ、別れは會ふことのはじめですから、どこの土地へ行きませうとも、また御縁があれば、いつでも會はれます。一旦は斯うして立つても、またお互にいつでも手を取り合つて樂しめる時が来るに違ひありません」

與八から云はれた事を受け賣りのやうにして、お松が一生懸命に人々の心を勵ましました。その翌日は、もう、運ぶだけのものを馬に積んで、乳母と子供は駕籠に乗せ、お松はある處まで馬で——七兵衛は途中のいづれかで待ち合はせるといふことにして、幾多の村人や教へ子に送られて、この地の土になるのかと思はれてゐたお松は、綺麗にこの地を立つてしまひました。

與八も、送ると云つて江戸街道まで姿を見せたには見せたけれども、自分が昔捨てられた

といふ新町街道のあたりへ来た時分には、もう與八の姿は見えませんでした。お松は聲をあげて與八の名を呼ぶ勇氣がありません、あの捨子地藏のあたりへ来ると、面を伏せて聲を飲みました。

斯うして、お松とすべてを立たせてしまったその夜——澤井の机の家の道場の真中に座つて、涎掛を自分の首にかけてひとり泣いてゐる與八の姿を見ました。

## 七十五

二里三里と、飽かずに送つて来てくれる見送りの者を強ひて斷つて歸してしまつた時分に何處からともなく旅姿の七兵衛が現はれて来ました。

こゝにまた不思議な事の一つはいつも七兵衛の苦手であつたムク犬が、最初から神妙に一行について来たが、今こゝで不意に七兵衛が姿を現はしても、吠えかゝることをしませんでした、温容に七兵衛の面おもてを笠の下から見ただけで、その後は眠るが如くおとなしくなつてゐることです、この事は、他の人にとつては氣のつかない事でしたが、七兵衛にとつて

は一時力抜けのする程案外の事でありました。ムク犬が吠えない代りに、恰度この前後に駕籠の中の郁太郎が不安の叫びを立てたものです。

「與八さん、與八さん、與八さんはゐないのかい、與八さん」

今更思ひ出したやうに、與八の名を呼びかけ、數へ年四つになつた郁太郎が、突出されたやうに駕籠の外へ出てしまひました。さうして前後の人を見渡したけれども、遂に自分の呼びかけてゐる人の姿が何處にも見えないことを知ると、

「與八さん、與八さん」

覺束ない足どりで、西に向つて——つまり、自分達が立ち出て来た方へ向つて走りはじめます。

「郁太郎様、どこへゐらつしやる」

登を抱いてゐた乳母がかけつけました。それを振りもぎつて走る郁太郎、馬上にゐたお松も馬から下りないわけには行きませんでした。

「郁太郎様——與八さんはあとから来ますよ」

「あとからではいけない」

お松の和めてとめるのさへも、肯かないこの時の郁太郎の舉動は、たしかに、平常と違つてゐることを認めます。

「與八さんは、あとから草鞋をどつさり、拵へて持つて來ますよ、だから、わたし達は一足先きへ出かけてゐるのです」

「忌、忌、與八さんと一緒になくては行かない」

「そんな、やんちやをいふものではありません」

「忌、忌、與八さんと一緒になくては……」

この時の郁太郎は、激流を拔手を切つて遡るやうな勢で、誰れが何といつてもかまはず、その遮る手を振り拂つて、西へ向つて、元來た方へ一八で馳せ戻らうと、あがいてゐるのです。

お松でさへも、手に負へないでゐる處を見兼ねた七兵衛が

「與八さんは、あとから來るから、皆んなで一足先きへ行つてゐるのだよ」

と云つて、あかく郁太郎を上からグツト抱きあげてしまひました。

「忌、忌、與八さんと一緒になければ、何處へも行かない」

抱かれた七兵衛に武者ぶりついて、遂に、七兵衛の面を平手でピシヤ／＼と打ちながら、泣き叫ぶ體は、全く今までに見ない事でした。

「では、與八さんの處へ連れて行つてやらう、さあ、こつち、かう戻るのだね」

七兵衛が、如才なく後戻りをして見せる、とその瞬間だけは郁太郎が納得しました。

さうして、物の二三間も歩いて、もうこの邊と、引き返さうとすれば、郁太郎は、火のつくやうにあがいて、

「忌だ、忌だ——與八さんの方へ」

和めても、すかしても、手段の利かないことを七兵衛も悟り、一行の者が全く持て餘してしまひました。

「與八さんに送つて來て貰へばよかつたのにねへ」

お松でさへも愚痴をこぼすより外はないと見た七兵衛は、

「この子は、與八さんといふ若い衆が本當に好きなのだから、この子の心持通りにしてやるのが宜うござんせう」

むづかる郁太郎を抱きながら、七兵衛は何かひとり思案を定めたやうです。

## 七十六

澤井の道場に、ひとり踏みとどまつた與八は、道場のまん中で、涎掛をかけつゝ、座りこんで無性に泣いてゐました。

今晚は、全く静かです、静かな筈です、先代の主人、自分の生命の親たる彈正先生は夙に世を去り、まさに當代の主人であるべき龍之助殿は、天涯地角いづれの處にゐるか、但し九泉幽冥の巷にさまようてゐるか、それはわからない——最近になつて復興して、竹刀の聲に換ゆるに呷啗の聲を以てした道場の賑ひも明日からは聞えないのです、さうして、お松さんも郁坊も登様も乳母も、あの人間以上と云つてもよい豪犬も皆んな行つてしまつたから、今晚といふものが、いつもの晩よりも、全く静かなのは當り前です。

こんな静かな處で、誰れもゐないのに、あの圖抜けて大きな男が、ちつぽけな涎掛けに紐のつぎ足しをして、それを首筋にかけ、大きく座り込んでホロ／＼泣き續けてゐるのだから、人が見たら笑ひものですけれども、今晚は笑ふ人さへゐない。

幾時かの後、與八は急に飛び上りました。

「郁坊やあーい」

立つて、道場の武者窓から外をのぞいて見たが、外は暗い。

「郁坊やあーい」

今度は、潜り戸をガラリと明けて外を見たけれども、外はやつぱり暗い。

いつもならば、この暗い中から、のそりとムク犬が尾を振つて出るのだが、今晚はそれも無い。

「郁……………」

と與八が咽び上がつて、悄々と道場の眞中へ戻つて來たが、また飛び上つて廊下傳ひに今度は母屋へ向けて一目散に走りました。

「郁坊やあーい」

道場よりは幾倍も広い母屋は幾倍も淋しい。

母屋のうちを一通り廻つて見た與八は、また道場の處へ戻つて来て、

「郁……………」

でも、何か、外に末練が残るやうで、耳を傾けました。

與八は物に動じない男、或は動ずる程の感覚を持つてゐない男ですが、今晚は特別に何かの幻覺を感じてもゐるらしい。

咽びながら静かにしてゐると、どうやら遠音におさな兒の泣く音がする、遠音とはいへ、思ひきつて近くも聞こえる、遠くなり近くなつて、おさな兒の泣く聲。

それが氣になつて、與八はゐても立つてもゐられない容子です。

たまりかねた與八は、遂に草履をひつかけて、表の方へ走り出しました、よし、何のゆかりもない近所隣の悪太郎の泣く聲であつても、この物すさまじい静けさには堪へられないから、それで、當は無くとも泣く子の聲でも聞いて見たくなつたのでせう。

ずつと、石段を下りて、街道筋まで走せ出して見たが、また空しく道場へ立ち戻つて見ると、道場の中で子供の泣く聲がします、與八は自分の耳を疑ひました。道場の戸を外から押し開いて見ると、提灯をつけ放しにして置いた道場の中のぼんやりした光域の間に、一人の子供がある。

「郁……………郁坊」

「與八さん」

「郁坊か」

「與八さん」

「郁……………」

「與八さん」

「郁……………」

「與八さん」

「お爺戻つて來たのかイ」

「おちさんが……おちさんが連れて来てくれた」

「そのおちさんといふのは」

「知らないおちさんが此處まで連れて来て呉れて、直ぐ歸つてしまつたよ」

「やうか」

與八は確實に郁太郎を抱き上げてしまひました。

## 七十七

その翌日は、門を閉ざし、廣い屋敷のうちに人のゐる氣配もなく、訪ひ來る人もありません。

萬事は昨日で終り、あとへ残つた與八だけが、此の大門を締めて、さうして與八自身も出立してしまつたものと村人は心得てゐるのでせう。

けれども、與八は残つてゐるのです。郁太郎も亦、この家に留まつてゐるのです、たゞ、表の門を締めきつて、二人共ほとんど、物の音を揚げないから、それで人が本當の留守と

思つてゐるのでせう。

與八は、今、室内の掃除をしてゐます——掃除と共に物の整理です、整理といふけれど、それはもう、殆んど全部、お松の手で整理され盡してゐたから、今、與八が整理にかゝつてゐるのは、與八の分として残されたものゝ整理です、それでも與八の爲に残された、當然、與八の所有物として残されたものゝうち、大部分は人に分けてやつてしまひましたから、今は、さう多分のものではなかつたが、それを與八はすべて一括してしまひました。一括して、どうするかと見れば、裏山へ持つて行つて、穴を掘つて、その中へ投げ込んで暫らく見てゐました、その間といふもの、郁太郎は絶えず與八に付ききりです、與八が母屋へ歸れば母屋、裏庭に出れば裏庭、道場へ戻れば道場——郁太郎は、絶えず與八につきつ纏ひつしてゐたけれど、静かなもので、ほとんど、一言も口をきくやうなことはないのです。

そこで、屋敷のうちは、いよく静かなものでしたが、裏庭へ穴を掘つて與八は一括したものを投げ込んだが、その上へ萱と柴を載せて火をつけてしまひました。

その火が、軽く燃え上つた處を、與八と郁太郎が靜かに眺めてゐたのは夕方のことです。今、徐ろに焼けつゝある一括りの中には、數日前お松が発見して呉れた涎掛もあれば、臍の緒もある筈です——その他、與八としては片時も離せない意義のある人達からの記念の品も皆んなそれに入つてゐたやうです、それを與八は皆んな焼いてしまひました、お濱の遺骨を持つて、郁太郎を背に負つて歸つて來た時以來の記念の品も皆んなこゝで焼いてしまつたやうです。

それだけは取つて置きなさいと、お松がゐたら當然忠告して差留めるであらう處のものまでも、與八は一切を穴に入れて焼いてしまつてゐるやうです、記念といふものは一つも残さないのがよいと思つてゐるからでせう——

それが燃えつくすのを、ゆつくりと二人は座つてながめてゐましたが、いよ／＼燃え盡したと見た時に、與八は鋤簾じよれんを取つて靜かに土を盛りました。

その翌朝、まだ暗いうち、村人の一人も起き出てゐない時分に、與八が郁太郎を脊にのり

て、今日こそは、この屋敷を發足する所の姿を見ました。

それは、お松の一行は東へ——さうして與八は西へ向つて多摩川を遡るのです、背に子を負ふてゐるからかぶることが出来ないためでせう、笠を胸に垂れて、さうして小やかな一包的荷物——草鞋脚絆に、いつもするやうな無雜作な旅装ひではあるが、たゞ、いつもと變つてゐるのは、與八の腰に帯びた一挺の鉈です——鉈といふ字、この場合彫と書いた方がふさはしいかも知れないが、それは、筏師がさすやうに筒に入れて籐を巻いたのを與八は腰にさしてゐます。

與八として、こんなものを護身用として持たねばならぬ人柄ではない筈です、これは東妙和尚から授けられて、これによつて、行く先き先きで、與八獨特の彫刻を試みてそれで世渡り、旅稼ぎをしようとの用心に外ありません——

行き／＼して、その翌日、大菩薩峠の麓まで來ました、與八としては珍しくない道、自分の立てたお地藏像はどうなつてゐるか——それにもお目にかゝりたいが、今日はそこでとゞまる旅路でない、峠の彼方にはお濱の故郷もあれば慢心和尚も待つてゐる——今度はそれ



より先きの道中、どうかすると何處の果かで辨信法師あたりにもぶつからない限りもないでせう。

## 七十八

根岸に閑居の神尾主膳とお絹は、閑居は相變らず閑居に違ひないけれど、この頃は幾分か荒みきつた生活に經濟的に潤ひが出来たらしく、お絹は、しげくと買物に出かけたり、家へ寄りつかないではしやいでゐることを以て見れば、何處からか水の手が廻つてゐるものと見なければならぬ。だが、どこからと云つて、外から來る處がある筈はない多分七兵衛あたりが、散々に人を焦らした上で、その稼ぎ貯めを、ばつとばらまいたものと見るより外は無いでせう、七兵衛の奴は、稼ぎさへすればいゝので、稼ぎためなんぞは存外、頭に置いてゐない男だから、自分が稼ぐことの興味と勞力との略ぼ、どの程度であるかといふことを相手に納得させてやりさへすれば、その粕に過ぎない處の稼ぎためなんぞは思つたより淡泊に投げだしてしまふに違ひない。處が、二人のうち、特にお絹といふ

女に取つては、その粕こそが珍重物である。

お絹は、その七兵衛の稼ぎための粕によつて、當座の自分達の生活に潤ひがついたことによつて、はしやぎ出し、今日も主膳に向つて、こんなことを云ひました。

「あなた、築地へ異人館が出来たさうですから見に行きませうよ」

「うむ……」

「大したものですつてね、あの異人館の上へ登ると、江戸中は皆んな眼の下に見えて、諸大名のお邸なんぞは、皆んな平べつたくなつて、地面へ這つてゐるやうにしか見えないんですつて」

「うむ……毛唐奴はなか／＼大仕事をやりやがる」

「異人は、何でもすることが大きいのね」

「うむ……あいつらの船を見たゞけでもわかる、忌々しい奴等だ」

「さうして又一番高い處へ登ると上總房州から、富士でも足柄でも目通りに見えるんですつて」

「話しほどでもあるまいがな」

「話しより大したものですとさ、本館が鐵砲洲河岸の一ばいにひろがつて、五階とか六階とかになつてゐるその上に、素敵に見えるし臺があるんださうですから」

「うむ」

「それに、その見晴らし臺には舶來の正銘に千里見透しといふ遠眼鏡が備へてあるから、それで見ると支那も亞米利加も一目ですとさ」

「話百分にも千分にも聞いてゐるがい」

「聞いてばかりゐても、つまりませんから、見てやりませうよ、丁度、天神下の中村様から傳手があつて、紹介してやるから、見物に行つてこいと云はれました」

「うむ、中村が……見てこいと云つたか」

「え、あの方、異人の大將に極心易い方があるんですつて、ですから、あの方に紹介していただければ、間取々々も皆んな見せてもらへるし、見晴らし臺へも上れるし、その遠眼鏡も飽きるまで見せてもらへるんですとさ」

「うむ」

「あなた、いらつしやらない？」

「うむ」

「わたしは、あなたもお連れ申して行くやうに云ひました、あなたとは云ひませんけれど、一人二人お友達をつれて行くかも知れないが宜しうござんすかと念を押しますと、差つかへないと云ひましたから、是非、一緒にいらつしやいませ」

「お前のお伴をして行くのも氣が利かないなあ」

「そんな氣取つた事をおつしやるな、却てお微行しゆぎのやうでいゝぢやありませんか」

「うむ、後學の爲に一つ見て置いても宜かりさうだ」

「ぜひ、さうなさい……では、そのつもりで乗物を云ひつけませう」

「まあ——待つて呉んねえ、お腹がすいたから兵糧をつかつてからのこと」

「やりやがる」とか「待つてくんねえ」とかいふやうな言葉が主膳の口から時々こゝろがり出すのは氏うぢより育ちのせいせう。

## 七十九

主膳とお絹とは、御飯を食べながら、頻りに異人館の話をしてゐます。

話といつても、主膳は受け身で、お絹だけが乗氣になつて、珍しいものゝ數々を、ひとり合點の受賣話見たやうなものです。

「それからねえ、異人にも随分、別嬪べっぴんがゐますとさ」

「さうか」

「あなた、異人の別嬪さんを御覽になつたことがありますか」

「毛唐の女なんて、まだ見たことは無い」

「處がね、その異人館にはね、その大將の奥様で、素敵な異人の別嬪さんが來てゐるんですとさ」

「うむ」

「それに、女中たちも、異人國からなか／＼すぐつたのを連れて來てゐるさうですよ」

「毛唐の女にも、別嬪と不別嬪の區別があるのかなあ、髪の毛が赤くつて、眼の玉の碧い奴にも美と不美とがあるのか知らん」

「そりや、ありますともね、さうして、その異人館の奥さんが別嬪の上に、異人館の主人がまたいゝ男なんですつて」

「毛唐の女に美人と不美人がある以上は、男にも、やつぱりいゝ男と悪い男との區別があるだらう」

「ありますともね、さうして二人共、大變中がよくつてお世辭がよく、日本の言葉が少しはわかるんですつて、さうして御亭主の方が、ワタクシ奥サン美人アリマス——なんていふと、奥さんの方が負けずに、ワタクシ旦那異國一番イ、男なんて、手ばなしでやるものですから、それは異人だけに愛嬌になつて、大へんな人氣ださうです」

「毛唐にも、相當に洒落者しゃれものがあるのだなあ」

「あなたはさう毛唐々と仰言るけれど……あなたばかりではない日本の人は皆んな毛唐々々つて、人間ぢやないやうに云ふけれど、つき合つて見ると、どうして異人の方が、よ

つほど日本人より捌けてゐて、物のわかつた處もあれば、人情も深いところがあるのですとさ」

「毛唐にも、そんな人間らしい心があるのかなあ」

「大有りですとき、その證據には、日本の女でね、初めは、見るのも汚れのやうに厭がつてゐたものが、鼻眞にされてるうちに、だんだんよくなつてよくなつて此方が熱くなり……」

「もう、よせ、それはらしやめんといふ奴だらう、日本に生れても日本人の部ぢやないのだ」「らしやめんなんて、悪口を云ふけれど、世話になつた女の人に云はせると、異人は情が深くつて、實があつて、それにお金は絲目なしに本國から来る、寶石や、羅紗は好きなのが撰り取りに貰へる、本當に異人はいゝ、異人さんに限る……」

「して見ると、お前なんぞも、そのらしやめん向きに出来てゐる一人だらう」と云はれて、はしやぎきつてゐたお絹が、ふくれ出し、

「何をおつしやる

「お前も一つ、その情深くつて、實があつて、お金は絲目なしに本國から来て、寶石でも羅紗でも買つて貰へる奴を一人二人相手にして見たらどうだ」

「忌なことを仰言いますねえ」

「お前といふイカ者食ひも、まだ毛唐を食つたことはあるまい」

「お氣の毒様……それよりは、そちら様こそ、異人館へ行つて、まさか奥さんはお話合になりますまいが、女中さんのうちの乙なのを一つかけ合つて見てごらんになつては……あなた程の悪食ですから、異人の女を食べたつて、あたるやうなことはございますまい」

「うむ」

こゝで主膳が、うむと云つたのは、どういふ意味かわからないが、挨拶に困つての詞だけのものでせう。

「何なら、お取持を致しませうか」

とお絹が、つぎ足したのも、隙間だらけでしつくりとはうつらない。

乗物が来たからお絹を一足先きに、主膳は後れて行くことに決めました。

お絹は、いそぐと出て行つたけれども、主膳はそれほど氣が進んではゐない、勸められた事柄が、風變りだから後學の爲に一つ見て置、てやらうかな、と云ふ氣になつたまでの事で、別段興をそゝられてゐる譯でも何でもないのです。

それでも、あつらへた乗物が来て見ると、やめるといふ氣にもなれず、それに打ち乗つて根岸から築地へ向けて急がせては見たが、乗物の中で、何となしに馬鹿々々しいといふ氣で、さつぱり目的の事に興味は持てないのです。

このことばかりではなく、主膳はこの頃は何事にも、さつぱり興味といふものが持てないでゐる、それは單に金が無いから、軍費が續かないから、それで面白くないといふだけではなく、今は金があつても、興味が持てないものがあるのです、乾ききつてゐたつひこの頃——逆さに振つても水も出なかつたこの程——錢さへあれば昔のやうに我儘にも遊べるし、綺麗に使ひこなすことも知つてゐる、錢が物言ふことを最もよく知り抜いてゐるだけ

に、お絹といふ女から、金が欲しい、金が欲しいと當てつけられた時は、むらくとして、押借強盗でも何でもいゝから、錢の入る方法があれば何でもやる、お絹といふ女も、錢にさへ有りつく仕事なら、萬引でも美人局ついでせでもやりかねない女ではあるが、環境といふものが、さうまでは進ましめないでゐる鼻先へ、七兵衛といふ奴が、猫に鯉節を見せびらかすやうなキザな眞似をして見せたけれども、結局、かなりまとまつた金を採つて来て、自分達に思ふやうに使はせることになつた。

使はせるものなら使つてやれ、——といふ氣になつたが、そこはお絹と違つて、事實、錢を目の前へ突き出されて見ると、使ひ捨てるのがおつくうだ、何だか白々しくつて、ちよつと手を出して見る氣にならない。

この錢を使つて、昔やつたやうな馬鹿遊びを繰返して見た處で何だ、さつぱり面白くないなあ、本來、遊びといふ奴に面白いものは一として無いぢやないか、そこへ行くと、あの女は、金があると、まるで、色氣づいてしまつて落ちついてはゐない、無い時は悄氣返つて小さくなつてゐるが、いざ、幾らか身についたとなると、あのはしやぎやうは——さう

して、勝負事に注ぎ込むんだ、買物なんぞは多寡の知れたものだが、あの女は、相手かまはず勝負事に目が無い。

だが、やりたければ、やれ、やれ、はくちでも、ちよぼでも、うんすんでも麻雀でも何んでいゝから勝手にやれ、こちとは、もうそんな事でめられるには甲羅を経過ぎてゐる。ばくちでも、ちよぼ一でも饒けついでゐられるうちが花なのだ、七兵衛から捲きあげたあぶく銭、幾らあるか知らないが、あの女の勝負事に使つた日には、いくらあつたつて底無し穴へ投げ込むやうなもので、遠からず、また壁へ馬を乗りかけるのは知れてゐる、さうなつた時分に、また同じやうな荒みきつた生活が繰り返される。

忌になつちまふな……神尾主膳は乗物の中で、こんなことを考へると、いよく忌になり引返さう、屋敷へ引返して字を書いていゝもゐた方がました、字に飽きたら子供をおもちやにして遊ぶことだ、毛唐屋敷が何だ、こんな事を考へながら、額に滲む汗の處へ手を當てゝ見ると、ザクリとその指先に觸れるものがある、それは、古屋敷の中で草に隠れた古井戸へ片足を突込んだやうに、主膳をして一種の不安と、今までとは違つた不快な思ひで胸

をカツとさせたものは例の額のあの古傷です。

こいつが——抑々この古傷が、斯うも自分を不愉快なものにしてしまつたのだ、錢がいやなのではない、遊びが面白くないのではない、皆んなこの額の刻印が自分といふものを刑餘の入墨者同様な卑屈な日蔭者にしてしまつたのだ、ちえつ！

こいつが——この傷が、これがあるお蔭で、この生れもつかない眼が一つ殖えたお蔭で、おれの半生涯がすっかり暗くなつてしまつた。

## 八十一

主膳は、むらくとして、その時に彼の辨信法師なる者に對しての渾身の憎惡どうをを如何ともすることが出来ません。

彼奴さへ無ければ、あのこましやくれた、お喋しゃべりの坊主のロクで無しさへ無ければ、こんなことにはならなかつたのだ、自分の面體いれずみものに生れもつかぬ刻印を打ち込んで、黥者同

様の身にしてしまったのは、あのこましやくれた、お喋りの小坊主の爲せる業ではないか——主膳がその時のことを思ひ出して怒ると、額の眞中の牡丹餅大の古傷が、バックリ口を開いて火炎を吐くものゝやうです。

全く、小坊主の爲に、自分はこんなにされてしまった。耳切りと入れ墨と二つを兼ねたやうな處刑を、あのお喋り坊主から受けて、自分は今日人前へ出されぬ面にされてしまった、憎い小坊主、天地間に憎いとも憎い小坊主奴——主膳は、キリ／＼と齒がみをしてその隣間には、自分といふものゝ過去は、すつかり抛却され、一にも二にも憎いものに向つて、その骨髓に食ひ入る憎悪心が燃え立ちます。

一にも辨信、二にも辨信、あいつがこのおれの面を世間へ面向けの出来ないやうにしてしまったのだ。思ひ一度びこゝに至ると、酔はない時でも、酒亂の時と同様に、食ひ入る無念さに、心身が惱亂し狂ひます、事實は、辨信から暴力をもつて、さうされたわけでも何でも無い、辨信も亦、彼に見せしめの入墨を與へてやらうとて、さうしたわけではなし、却つて神尾の暴虐の手から遁れやうとする途端に、無心のハネ釣瓶があつて、主膳の額か

ら、あれだけの肉を剥ぎ取つて行つたもので、無論、主膳自身の暴虐が、さういふハズミを食はせるやうに出来てゐた、それこそ、當然の刑罰が、ハネ釣瓶の手を借りて痛快に行はれたものに過ぎないから、怨むべくば、井戸の釣瓶を怨まねばならない筈なのに、主膳は、その事なく、辨信を極度まで悪み、あの時完全に、あのお喋り坊主の息の根をとめてしまふまで見届けなかつたことを、親の仇を取り逃した程に残念に思ふ。今も、乗物の中で、それを思ひ出した主膳は、もう矢も楯もたまりません。

「駕籠屋、もういゝから、根岸へ戻せ、築地へ行くのは止めた、根岸へ戻せ、戻せ」  
主膳の斯ういつた言葉と出逢頭に、外では駕籠屋が、

「旦那様、曝らがしございますが、御覽になつちやいかゞですか」  
「え、何？」

「曝らしでございます」  
主膳の肝癢と、駕籠屋の注告とが、ぶつつかつて、ちよつと火花を散らしたが、駕籠屋の注告に制せられて、

「曝らしとは何だ」

「御覽なさいまし」

駕籠屋が外から垂れを上げたものです、今まで自分だけで心頭をいきり立たせてゐたものだから、外面を乗物がどううついて来たか、その邊は一向、耳にも入らなかつたのだがさういはれた瞬間に、入通りの劇しい音が主膳の耳に入り、つゞいて、外から刎ねられた垂の外を見ると、そこに

「曝らし物」

うむ、はゝあ、いつの間に、日本橋まで来てゐたのか。

こゝは日本橋だ、しかも日本橋の東の空地だ、成程、曝し場に違ひない、小屋があつて、筵が布いてあつて、後ろに杭があつて、その前にズラリと一連の曝らし物がある。

曝し物は、官がわざ／＼曝して、衆人の見る物に供するのだから、只でさへ、物見高い江戸の、しかも、日本橋の辻に官設してあるのだから、見まいとしてもそれを見ないで通ることを許されないやうになつてゐる、駕籠屋は、乗主に對する義務として、わざ／＼注意

して頼みもしないのに、進行を止めて、垂まで上げて見せやうとする、それに是非なくて垣の隙間から主膳が見ると、苦りきつてしまひました。  
生き曝の坊主が珠數つなぎになつて曝されてゐる。

## 八十二

それを見ると、苦り切つた主膳は、一旦、舌打ちをして見たが、何と思つたか、急に兎頭巾を取り出すと、それを自分の頭にすつぽりかぶつて、

「坊主の生曝しは近頃珍だ」

と云つて、乗物から、のそ／＼と出て來ました。

「御覽になりますかねえ」

駕籠屋共は、公設の曝し物の前を乗打をさせては、乗主に申譯が無いといふお義理から、ちよつと進行を止めて見たのが、乗主は意外にも、それに乗氣になつて、のこ／＼と駕籠を出たものだから、少し案外に思つてゐると、主膳はメカ／＼と人混の中へ行つて、その



坊主の生き曝らしを兎頭巾の中から凝と見据えてしまひました。

「旦那様——」

「宜しい、貴様達は、もう勝手に歸れ」

「築地の方は、如何いたしませう」

「少し寄り道をして行くから、貴様達はこれで歸れ」

主膳は、相當の賃銀を與へて、乗物を返してしまひました。

さうして、人立の中へ分け入り自棄になつて、思ひ入りこの曝し物を見てゐる。

都合五人の坊主が、杭に縛りつけられて、箆の上に引き据えられて、縦横無盡の曝らし物になつてゐる。

その脊後には高札があつて、何故にこの坊主共が斯うして生き曝しにされてゐなければならぬかの理由が記してある、それを讀むまでもなく、神尾主膳は、

「千隆寺の坊主共だな」

千隆寺の坊主といふのは、根岸の自分達のつい近所にゐて、立川流とか何とかいつて、子

を産ませるお呪ひをする山師坊主の群だ、しかも、その親玉の敏外といふ奴は、自分の昔の馴染友達であつた。

だが、こゝには、その親玉の坊主はゐない、その取り巻や下つ端、現に自分の處へ、親玉を置いてた時分に、よく秘密の使者にやつて來た若いのも、現在こゝにゐる。

「見られた醜態ぢやねえな」

と主膳が、自分の古傷を自分で發いて興がるやうな心持で、その坊主共の面を一々頭巾の中から見据えてゐました。

曝し物といふものは、見せる爲に据えつけて置くのだから、いくら見据えた處で、文句の起る筈はないが、主膳が斯うして痛快な氣分で、

「見られた醜態ぢやねえや」

巻舌をしながら見据えてゐるのは、その氣が知れない事です。

主膳としては、此奴等が、顛面の刑罰を蒙つて、見せしめになつてゐることに向つて、官邊と市民の制裁が至當であることを世道人心の爲に我意を得たりとして、見てゐるわけ

はありますまい、と云つて、氣の毒なものだ、さして腹のある奴等でもないのに、山師に操られて、心ならずも深入りした爲に、假りにも出家僧形の身を、斯うして萬人の前に曝し物にされてゐる、兎も角も、何とかして取りなして見てやりたい、……といふやうな測隠の氣分で見てる筈もない。

だが、見られたザマぢやあねえや……といふ呟きの下には、たしかにイ、氣味だ、どうだい、さうして曝し場の道に座つてゐる座り心は、どんなものだい……といつたやうな意地悪い色が、眼の中にかゞやいてゐる、つまり、神尾主膳は、痛快な残忍性をそよりながらその曝され物が、殊に多少は自分の身に近い處から出たといふことに、一層の快味をもつて、飽かず見据えてゐる、と見るより外はありません、その中に、人集りの中から、

「なあんだ、なまぐさ坊主の癖に、いやに好い男でゐやがらあ、向ふにゐるあの坊主なんざあ、羽左衛門そつくりだせ、大方坊主と見せて蔭間でもかせいでゐたらんだらう」といふ職人の悪口が主膳の耳にとまりました。

「蔭間だ、蔭間だ、坊主抱いて寝りやめ、つちやく、ちやく、可愛い、どこが尻やらドタマヤら」

この聲で人集りがドツと笑ひました。

## 八十三

幾時の後、吉町の金筒といふ茶屋の一間で、醉眼を朦朧とさせてゐる神尾主膳を見る、次の間には、抜からぬ面で御機嫌をうかゞつてゐる野だいこの金公を見る。

「金助、おれは何を見ても聞いも此の頃はさつぱり面白くないんだ」

と主膳がいふ、金助ベタリと額を一つ叩いて、

「頼もしいござんせん、御前なんぞはまだ、勘平さんの頭を二つか三つといふ處でげせう、三十九ぢやもの花ぢやもの、まだく／＼花なら蕾といふ處でゐらつしやいます、それに何ぞやこの世が面白くないなんて、心細いことを御意遊ばすやうでは、金助如きは、世間が狭くなつて、もう一寸たりとも、お蔭元が歩けません、いざ改めてお發し下さいませ、

行道先達、ヨイシヨ」

金助は相變らずアタの抜けないお追従を並べて得意がつてゐる。

「見るもの、聞くものが面白くないばかりか何を見ても聞いても癪にさわることばかりだから、今日は、こゝへしけ込んだを幸、貴様を呼び寄せて横つらを引ばたいてやらうと思つゐるのだ」

「これは驚きやした！」

金助は頬をおさへて、矢庭に飛び上がるやうな恰好をし、

「氣がくさくするから、金助を呼び出して、うんと引ばたいてやらうなんぞは、全く恐れ入ります、引ばたく方の御當人は、それでお氣が晴れましても、引ばたかれる方の金助の身になつてごらうじませ」

金助は、仰山な表情をして、痛さうに頬を押へ、

「併しまあ、殿様、金助如きが面でも、打つてお心が晴れるなら、たんとお打ちなさいまし、金助、殿の御爲とあらば横つ面は愚か、命まで厭ひは致しませぬ」

「ぢや、なぐるぞ」

「まあ、お打ち下さいまし」

「いゝか」

「はい、殿の御爲とあらば骨身を碎かれても厭ふ處ではござりませんが、それに致しましも成るべく痛くないやうにお打ちを願ひます、へボン先生に足を切らせると痛くないやうに切つて下さるさうですが、あの傳で一つ……」

「それ、面を出せ、横ツ面を……」

「はい、成るべく、どうか、そのへボン式といふ奴で」

「いゝか」

「是非に及びませぬ、こんなことだらうと思つて、家を出る時に、女房子と水盃をして出て参りました」

「泣くな」

「泣きやいたしませぬ」

金助は覺悟をして、なめくぢのやうな恰好をし、頬の處を主膳の方に差向けて酔つばい面をしながら、

「いつぞやは、御新造様に打られました、あれは餘り痛みませんでございました、その前は女輕業の親方に打られました、女とは云へあの方は、ちつと藥が強うございました、女とは申せ、あの女輕業の親方などは氣が荒うげすからな、自然、痛みの方も激しうげしたが、そこはそれ、痛みが強いだけ、利目の方もたしかなものではな、この風通と、このお召と、それから別にお小遣が若干……」

「タリ言を云ふな、それ、行くぞ」

神尾主膳は、思ひ切つて金助の横つ面をピツシヤリト食はしたが、

「あつ！」

その途端、金助は仰山に後ろへ引くり返る、平手で横つ面を引ばたかれたにしては、手當りが少し變だと思ふも道理、金助が横ッ倒れに倒れた周圍には、山吹色の木の葉のやうなものが、あたりまばゆく散亂してゐたから、眼の色を變へて起き直り、

「斯うお出でなさるだらうと思ひました、骨身を砕くだけのものは、慥かにあると、斯う信じたものでげすから……へ、へ、へ、金助の眼力がんりきあやまたず」

金公は驚悦して、その山吹色の木の葉のやうなものをかき集めにかゝる。

## 八十四

山吹色の木の葉のやうなものを箱へ入れて濟ましこんだ金助に向ひ、

「金公、おれは今日、日本橋で變な曝らし物を見て胸が悪くつてたまらないのだ」と云つて、神尾主膳は坊主の生き曝らしの話を話し、

「全く、イヤな物を見せられたが坊主の生き曝らしといふ奴はまた痛快なものだ、いゝ氣味だと思つて、わざ／＼駕籠から下りて穴のあく程見てやつたが、全くいゝザマではあつたが、小癩にさほることには、その坊主共が、曝らし物のくせに、イヤに男つぶりがのつべりしてな、彼奴は蔭間だらうと見物が云つてゐた」

それから急に胸が悪くなつたが、いつそ胸の悪くなつた序に、一番、その蔭間といふ奴をおもちやにして見てえ。

今でこそ、蔭間は法度になつてゐるが、そこは裏があつて、吉町よしちょうへ行けば、古川に水絶え

ずで、いくらでも呼んで遊べる、殊に、この金筒のお倉婆あ、その方に最もつてがあることだから、やつて来たのだ、金公、貴様お倉婆あと相談して、よきに取計らへ——と主膳がいふ。

それを聞いて、金公が心得たりと小膝を丁と打ち、呼べる段ではない、この金筒のお倉婆あこそは、今は蔭間専門を内職とし、こゝへ申し付けさへすれば、到る處に渡りがついてゐて、舞臺子、かげ子、野良の上品下種、お望み次第だといふこと、その來歴、遊び方、散財の方法などを、心得顔に並べるのがうるさく、神尾は、丁度傍へ來合せた三毛の若猫を取つて、それを上手に投げると、得意になつて振りたてゝゐた金公自慢の鬚つぶしにその猫が取りつく、

「あいつ、あいつ……これはまた恐れ入りやした、悪い洒落でございます、猫を脊負ふとてお脊中をかつかぢられやせぬものを……これく、わりや、身共がつむりを噛んで何と致す」

金公は、頭へのせられた猫を取り下ろさうとしたが、猫が鬚に爪をからんで離れない、金

助がいよいよ騒げば、猫がいよ／＼うろたへる、その結果は散々に、鬚と額をかつかぢる。

「こりや、これ男の面體へ」とか何とか云つたが追付かない。

それを見て神尾は面白がつて笑ふ。

結局、金公は自力では、この猫を自分の頭から取り外すことが出来ないことになる、取り外して外せないことはないが、強いてさうすれば、自分の鬚を全部犠牲にしなければならぬ、その上、この頭の部分に負傷する虞もあるから、今の處でなし得ることは、ちつと動かないよう、猫を頭の上に載せたまゝで両手をあげて抑へてゐるだけのものです。

抑へられた猫は、その窮屈に堪へないで動かうとする、その爲に、痛い思ひを我慢する金公の面を見て、主膳が大聲をあげて喜ぶ。

結局、金助は、この場に居たゞまらず、猫を頭に載せたまゝで、下の座敷へ向つて逃げ出し、誰ぞもう少し好意を持った相手の力を借りることより外に最上の道はないことを知つた。

さうして、金助を追拂つてしまつた後の神尾主膳は、脇息を横倒しにして、それを枕に天

井に向つて、太い息を吹きかけながら横になりました。

男色を弄びに来たといふことが愉快を買ひに来たのではなく、男性といふものゝ侮辱ついでに、もう一步進んで侮辱を徹底させてやれといふやうな残忍性が、主膳をこんな處に導いたものである、侮辱といふけれども、この場合、主膳自身が侮辱されたわけではないが侮辱されてゐる男性の端くれを、日本橋で見たのが、男色を商ふやからに似てゐると云はれたついでに、男性が男性を侮辱するも一興だらう、とこんな謀叛心で——ここへやつて来たものだらうか、何も特別に執著を感じてはゐない。

横になつて、さうしてやつぱりこの倦怠した、この不安不快な氣分をどうしやうといふ氣にもなれない、結局、酒に限る——酒に落ちゆくより外ののが、れ場はないといふに歸する。

## 八十五

主膳が再び、うたゝ寝からさめ、

「金助——金助」

「はい、殿様、お目覚めでござりますか」

「何だ、お前は」

「はい」

神尾主膳は、二度目のうたゝ寝から覺めた朦朧たる眼を据えて、今、眼前にわだかまつてゐる代物を見ると、壓倒的に驚かされないわけには行きません、それは金助ではない、金助とは似ても似つかぬ一人の女、しかも、小山の搖ぎ出でたやうなかつぶくの女、銀杏返しに髪を結つて、縞縮緬か何かを著て、前掛をかけてゐる、呆れ果てた主膳は、

「お前はこゝの女中か」

「はい」

「大い女だなあ」

「はい」

「あんな、こちが最前呼んだ金助といふがゐるだらう」

「金助さんは、ちよつと急の用事が出来ましたから、殿様のおよつてゐる間故、御挨拶も

申上げず、ちよつと失禮いたしますから、殿様の御機嫌に障らないように、よろしく申上げてくれと行つてお出かけになりましたよ」

「うむ、金公が出て行つたのか、では、お前でもいゝ、酒を持って」

「お酒は、おやめ遊ばしませ」

「何、酒を飲むな」と主膳は大女の面をまじく／＼と見て「料理屋へ来て、酒を飲むなと云はれたのは初めてだ」

「はい、殿様は酒亂の癖がおありになるから、お酒のお言ひつけがあつても、なるべく差上げないやうにと、おつかさんから云ひつかつて居りますへ」

「ふん成程、貴様は正直者だ、云ひつかつた通りを、客の前で云つてしまうのは、正直者でもあり、新前しんまいでもあるな、一體、いつどつちの方から、この店へ来た」

「はい——もとは兩國にも居りましたが、近頃は田舎廻りをして居りました」

斯う云はれて見ると、その昔女輕業の一行のうちの人氣者で、甲州一蓮寺の興行から行方不明になつた力持のおせいさんといふ者があつた事を知る人は知つてゐる。その時分には

神尾主膳も甲府にゐた、主膳としても、あの女輕業を見物に行つた覚えのあることは確かだ、その一座の中の看板に現在眼の前にある怪物が客を呼んでゐたかゝつたか、そんなことの記憶までは残らう筈もない。この怪物の方でも、當時の見物の中に、あの時おしつ徴しつ行しつで通つた彼地のお歴々としてのこのお客様の姿形を頭に残してゐやう筈は無いに定まつてゐる。

主膳は、この思ひがけない大女の出現と、その大女が、酒をすゝめる爲でなく、禁酒の監視役として出張して来たやうな態度に、相當興をさまさないわけには行きません。

「一杯位はよからう、ほんの一杯飲ませて呉れ——相手の来る迄の退屈凌ぎにな」

「少し位ならかまひません」

「許してもらへるかな」

「食べ過ぎて、酒亂を起しさへしなければ、差支はございません」

「差支へないか」

主膳は、お茶屋へ、酒飲みの請願に來たやうな心持で、いつそ、多少の愛嬌をさへ感じた

らしく、

「さしつかへ無くば、ほんの少々のお下げ渡しを願ひたい」

「お待ちなさい、わたしが、おつかさんに相談して、差し上げていゝといはれたら、差上げることにいたします」

「さうか、では、おつかさんに相談して、程よい處を少々、お恵み下し置かれたいものだ」

「待つておいでなさい」

大女は、のつし／＼と出て行つたが、その後で、神尾主膳は呆れがとゞまらない。

それでも、暫らくして、盃酒をとゝのへて来て、主膳をもてなすだけのことはしました。お酌もすることはするが、どこまでも、自分が監視して飲ませるのだ、特にこのお客に限つては本部からの監視命令があつて、飲ませるには飲ませても、程度がある——といった申付を露骨に遵奉してゐる手つきが腹も立てないでいよくお愛嬌だ。

## 八十六

でも、この監視つきのお酌で、一杯二杯と傾けてゐるうちに、相當にいゝ心持ちになつて行くのは奇妙だと思ひます、これは、下手な御機嫌取りの取持ちや、見え透いたお世辭者よりも、この大女にしてお酌と監視役とを兼ねた山出しが、時にとつての愛嬌となつた爲でせう、大女のきごちないお酌のしつぷりが、却つて興を催したものだから、神尾主膳は、いゝ氣になつて立て續けに二杯三杯と呷り、女が狼狽ぶりを、いよく可笑しく、まぢまぢちとながめて、漸く悦に入り、

「大きいなあお前は、一體、目方は何貫あるんだ、カンカンは」

「生れつきだから、どうも仕方がありません、瘡せたいと思つても、瘡せられやしません、削るわけにも行きませんからね」

「強ひて瘡せたり削つたりするには及ぶまいではないか、世間には肥りたがつて苦心してゐる者もある」

「商賣をしてゐる時は、肥つてゐてもいゝが、かうして御奉公をしてゐる時は、瘡せてゐる方が、どの位樂か知れないと思ひますね」



「商賣——肥つてゐてもいゝ商賣といふのは何だ」

「樂をしてゐると、却つて肥りますねえ」

「うむ、苦勞をすると人間は瘠せる、お前なんぞは苦勞が足りないのだ」

「随分、苦勞もしましたけれど、なか／＼瘠せませんねえ」

「ちつと、親肉しんにくを切つて賣り出したらどうだ、いゝ肉だなあ、豚一の殿様へ持つて行けば物云はず一斤廿匁でお買ひ上げになるぜ」

神尾は力持のおせいの肉體を著物の外れからつく／＼とながめてゐるうちに、その眼の中に皮肉と陰翳の色が、そろ／＼と溢あふれ出して來ました。

通常の人、物を見るのに二つの眼を以てするけれども、神尾主膳は三つの眼を以てするのです。

殊に、辨信法師から眞中の特別な一つの眼を授けられて以來といふものは、父と母とから興へられてゐる二つの眼が、寧ろそれを見まいとして避ける場合にも、その一つだけが、パツカリと明いて、最後まで、それを凝視してゐなければやまないやうです。

日本橋で、僧侶の生き曝しを徹底的に見まもつてゐたのがこの眼でした、そして、僧侶といふ人間界の特別階級の爲せる汚濁をぢよくと冒瀆が、白晝、俗人環視の眞中で曝されてゐることを見て、その眼が、痛快な表情を以てクル／＼と躍り出したかのやうに、交る／＼その曝し物を貪り見て飽くことを知りませんでした、これは、單にこの事のみ限つた例ではありません、すべて、その視力の及ぶ限りでは、人間といふものゝ間に行はれる、すべての汚辱と冒瀆、破倫と没徳、醜惡と、低劣、さういふものに向つては燃えつくやうな熱と、射るやうな力を以て、それを見のがすまいとはしてゐます、見出したが最後、それが燃え盡すまでは、見捨てるといふことは不可能らしい。

坊主の冒瀆ぶりを貪看して、飽くことを忘れたこの眼が、その坊主が蔭間かげまといふ人間界の變則なサード種族に似てゐるといふ偶語を聞いてから、その凝視から一時解放されると共に、今度は、その蔭間といふ奴を見てやらねばならぬ——といふ熱と力との變化して來たのは當然のやうな徑路でありました。

この眼こそは、人間といふものが極度まで汚さるゝ處を見たいのです、それが、底知れず

に犯されて行く現場を見たいのです、偶然にそれを見ることが出来れば幸、さうでない限りは、自分から——自分といつても、眼といふ機關だけのそれ自身では自由行動の能力が無いから、取り敢へず自分だけの持てる能力を極度に誘導發揚して、その心を唆かし、さうして此の四肢五體の主人公を動かして退引ならぬ現狀を作らせ——さうして置いて自分は一段高い處にゐて、飽くまで其の現狀を凝視することを、寧ろ必須の食物でもあるかのやうに心得てゐるらしい。

## 八十七

その目的物を見ようとする途中の道草としての、この女化物に、神尾が、かりそめの興味を呼び起して見ると、梯子酒のやうに、その残忍性が募つて來るのは、この男の持前です。バックリと口を開いた真中の眼が、力持のおせいといふものが有するアブノーマルな肉體に向つて貪着を起しはじめたのが運の盡きでした。

「おい、お前、女角力おんなすまかといふものを見たか」

「え、女角力でございますつて」

「見たかぢやない、お前も、前生はその女角力で鳴らした仲間ぢやないか」

「否え、角力はやりませんでした」

「角力はやらなかつたが……その身體で何をやつてゐたえ」

「何でもいゝぢやございせんか、そんなことを仰言らずに、もう一つ召しあがれ」

「おやく、御意見役が今度は、お取持になつたのだな」

主膳は、おせいがテレ隠しにすゝめる酒を受けて飲み、

「女角力をやつてゐたのだらう、何處でやつたい、神明かい、兩國かい」

「女角力なんて、やりやしませんよ」

「なあに、やらないことがあるものか、たしかにお前が女角力の關せきで鳴らしてゐるのを兩國で見たよ」

「え！」

「そうら見ろ、隠したつて駄目だ、お前は兩國で、後白浪おしろなみといつて關相撲を取つてゐたあ

れだらう、白ばつぐれても、こつちには種があがつてるぞよ」

「それはお人違ひでせう、兩國にもあるにはあつたけれど、角力なんぞ取りや致しません」

「隠すなよ、隠すと裸體はだかにして證據をあげて見せるぞ」

「隠しやしませんよ」

「それぢや、兩國にゐたらう、さうして女角力をとつたらう、どうだ、その時の事を話して聞かせないか」

「そんなこと、お聞きになるものぢやありません」

「聞かせたつていゝぢやないか」

「そんなこと、どうだつて、いゝぢやありませんか、それよりは、もう一つ召上れ」

「おやゝ、御意見番から再度の杯、そろゝ味が出て來た」

「殿様は、ちよいゝ此の家へいらつしやいますか」

「昔はよく來たものだが、今日は、思ひがけない出來心でな」

「子供衆をお呼びになるんださうでございませぬ、近頃珍しいお好みだと、おつかさんが云つてましたよ」

「うむゝ」

「もう見えさうなものですねえ」

「いゝよゝ、さう急がんでもいゝ、處で、お前、その女角力としてのお前の經歷を、一つ話して呉れないか」

「いけません、わたしは女角力の仲間には入つたことにはございませぬよ」

「無いことがあるものか、あの女角力といふ奴、あれでなかゝ愛嬌者でな、今は差止められてしまつたが、以前はなかゝ流行はやりつたものだ」

「さうでございませうね」

「さうでございませうぢやない、お前なんぞは、それで鳴らしたに相違ないが、商賣はやめても力はあるだらうな、力は」

主膳は、しつこく、おせいを追究して、その肥大なる肉體にさはると、

「殿様は、わたしを女角力とばかり定めておしまひになるが、わたしは一向、女角力のことなんか存じませんよ」  
と云つておせいが、主膳の膝をしたゝかつねりました。

## 八十八

「あいッ」

主膳が、つねられて驚くと、おせいは平氣なもので、

「御冗談をなさいますな、角力こそ取りませんでした、わたしやこれで今でも男の二人や三人何でもありませんよ」

お角さんにしては少し舌の足りない、たんか、を切つたので、いよいよ興に乗つた神尾主膳は、

「さうだらうとも、男の二人や三人、振り飛ばすは何でもあるまい、どうだ、おれと角力をとつても負けまいな」

「殿様だつて誰れだつて、やわらさへお使ひにならなけりや頭から押へてしまひますね、ですから、おつかさんが、若しや殿様が酒で亂暴をなさつたら、かまはないから、頭から抑へてしまいなさいと云ひました」

「成程……」

神尾主膳が舌を捲いて、成程さうありさうなことだと思ひました、同時に、こいつ、金公とお倉婆あに頼まれて、自分の酒の監視役に來たのみならず、まかり間違へば、このおれを取押へ役までいひつけられて來たのだなと思ひました。

よし／＼、その儀ならば、こつちも一つその裏を行つて、この化物を虞おそにしてやらう、人間が少し馬鹿だから、虜にするには誂へむきだ、いよ／＼當座のよいおもちやが出來たものだと主膳の興が湧き上りました。

だが、主膳がこの女を、女角力の後身だと見誤つてゐることは前と變らない、女角力でも女力持でも大して變りはないのだが、女角力と壓倒的に斷定されてしまつては、女力持はやつたけれども女角力の經歷のないおせいが躍起となつて辯明せずにはゐられないらしい

それにもかゝはらず、主膳は、一圖に昔見た女角力のことが、その頭の中に現れて来たものだから、

「十年ばかり前だったが、女角力が流行つたものでなあ、その中でも、女と座頭ざとうの取組といふのはヒドかつたよ」

「座頭ざとうと仰言るのは何ですか」

「お前が知らないなら、話して聞かせてやらう、座頭といふのは、あんまのことだ、あんま上りの目の見えない男を引張り出して来て女角力と取組ませるのだ」

といつて、主膳は、今は禁止になつてゐるが、その頃、目のあたり見た、見せ物の一つとしての女角力と座頭との取組の光景を話して聞かせやうとする。

日本の女としては、耻かしがる裸體を見せ物として提供し、それに男性の不具者としての座頭をなぐさみ者として取組ませ、つまり、この社會の弱者二つを土俵の上へのぼせて、大格闘をさせ、それを見せて金を儲けようとするものと、それを見て、やんやと喝采する社會的殘忍性を思ひ浮べて、主膳のバックリと開いた額の眞中の眼が爛々として輝き始め

ました。

「それは面白かつたでせうね」

「うむ」

主膳は、またその淺ましい見世物を他事ひとこととして面白く聞かうとする、この大女の馬鹿さ加減を痛快なりとしました。

「處で、女角力といふ奴には、あんまりいゝ女は無かつたね、お前程の緞纒きんぎょのやつも無かつたよ、その管さ、いゝ女は角力を取らなくても食つて行く道がある、どれもこれも御面相はお話にならなかつたが、おれの見たうちに、たつた一人、美人と云つていゝのがあつた、何しろ、おたふくでも大道白でも、竹の臺の陳列場ちんれつばのやうに裸體はだかでありさへすれば人が寄つて来る女角力の中へ、美人と名のつけられる代物しろものが一つ舞ひ下りて来たのだから、助平共が騒がなあ、おれは騒がなかつたけれども、おれ達の仲間の不良共は騒いだよ、その別嬪べっぴんの女角力の名は、此家のお倉婆くらばと同じことにおくらといふ名だつたが——そのおくらが問題なんだ」

斯ういふ話をはじめ出した時に、主膳がいよく興ざめたのは、この女が興にのつて膝を乗り出して來ることでした。

このおれの監視役兼取押へ方を命ぜられて出張してゐる癖に、こちらの挑發に引かゝつて、女角力の昔話にうつゝを抜かさうとする此の女の馬鹿さ加減がいよく淺ましくなりました、女角力といふものゝ存在は、つまり自分といふものゝ存在の侮辱だと感じないで、一緒になつてその侮辱を享樂しようといふ氣乗り方に、主膳はすっかり興をさましました。興をさましたとか、淺ましく感じたといふことは主膳に於て、そこで、うんざりして拋棄するといふ意味にはならない、こちらが興がさめて、淺ましく感ずれば感ずるほど、そちらが興に乗つて、息をはづませて來ることの皮肉をよろこんでゐる。

「處で、おれ達の仲間の不良共が、十餘人連名して、その別嬪の女角力、おくらといふのに注文をつけたのだ、その注文といふのは……つまり、そのおくらに「娘一人に掣八人」

をやらせろといふことなのだ「娘一人に掣八人」それはお前も知つてゐるだらう、知らない？ 知らないければ話して聞かせる……」

と云つて、神尾主膳は「娘一人に掣八人」の故事を話し出す前に、盃を取つて、おせいの眼の前に置くと、おせいは無條件になみ／＼とついである、その無條件になみ／＼と注ぐ手つきを見て神尾が勝ち誇つたやうな面をしてニタリとする、當然、この女は監視役と取押へ方心得も忘れてしまつて、神尾主膳がおもしろい話をして呉れさへすれば、いくらでも酒を注いでくれることにまで軟化しきつてゐることを認めたから、そこで主膳がニタリとする、さて一盃傾けて話し出したのは、

自分は仲間に加はらなかつたが——と特に念を押して置いて、自分達の友達の不良が、十名連合して、女角力の美人のおくらを目あてに「娘一人に掣八人」のお好みをつけたといふのは、要するに、そのおくらといふ女角力の裸體だけでは物足りない、どこからどこまで見てやりたいといふ、悪辣な好奇心から興行主の座元へ幾らか掴ませ——二兩やつたとかいふ話だ——世話人二人に幾らか鼻薬をやつて渡りをつけた處が、その世話人といふ奴

の中に、一人、かねぐこのおくらを口説いてゐた奴があつたが、おくらがうんといはな  
いものだから、それを遣恨に思つてゐた處へ、この話だつたものだから、こいつが眞先に  
呑込んで、それからおくらに忌應なしに「娘一人に掣八人」をやらせたものだ。

つまり、男座頭を八人集めて土俵へのぼせ、それをおくら一人に取り組ませるのだ、一方  
は目くらだから目くらさがしだが、狭い土俵の上で八人の男、十六本の手、足共では三十  
二本でやられるのだから、いくら目くらさがしだつてたまらない、終におくらがつかまつ  
て手取り足取り……それは見てはゐられたものぢやない。

神尾がそこまで話すと、大女のおせいも、さすがに眉をくもらせて、

「可哀相ですね」

「さうなると、お前も同情して来るだらう、處で、さういふ時お前ならどうだい、座頭の  
八人位何の苦もなく手玉に取るだらうな」

「さうは行きますまい、一人と八人では幾らなんでもね」

「は、は、は」

「お前でも、やつぱりやられるかい」

「わたしだつて、苦しいわ」

苦しいわと云つて、自分ながら大きな肉體に壓されるやうな苦しさから、息をせい／＼は  
づませてゐる。

神尾主膳は、苦しうなおせいの肉體を痛快らしくながめて飲みほした盃を黙つてその前  
に置くと、おせいは脆くもこれにまたなみ／＼と注いでやりました。

それを飲みながら神尾主膳がニヤリ／＼と大女の形を見てゐると、その大女が、

「そんなにわたしの身體ばかり見ておるでになつては溶けてしまひますよ」

「あ、本當だ、そら溶け出した／＼」

## 九十

「は、は、は、は」

神尾主膳がまたも突然高笑ひをした時に、力持のおせいが飛び上がつて慄へ出しました。

これは實に、怖るべき酒亂が突發して來る前兆でありましたけれど、はじめてこの人を見るおせいとしては、その主膳の怖るべき酒亂の豫感から怖れて飛び上つたのではありません。

「は、は、は、は」

と笑ひ出した途端に、主膳の三つの眼がキラ／＼と光り出して、脇息に脇を持たせてゐる主膳の姿が急に大女の自分をさへ壓迫する程の大きさになつたから、慄へ上つて飛び出したものです。

「あ、三目入道……」

その瞬間に、さう思つたのです、よくお化け話で聞いておどかさされてゐる三目入道といふのが、繪舂紙でも見たが、あれだ、この人はその三目入道だ、これは人間ではない、怖ろしいお化だと感じました。

そこで、監視役も取押へ方心得も盃も盤もおつ放り出して下の座敷へ逃げ下りてしまひました。

「は、は、は、は」

神尾主膳が三度目に笑つたのは、それは少し凄味が缺けて和氣が加はつたやうです、つまり前の笑ひ方は怖るべき酒亂の前兆としての高笑ひでしたけれど、今度のは滑稽嗜飯こつぱい、おんまんが加はつての可笑しさから來てゐる笑ひが多分のやうです、それは大女の恐怖と狼狽ろうたいぶりが餘りに仰山であつたからでせう。

これより先き、下の座敷では、一旦出かけて行つた金公が、またコソ／＼と立ち戻つて來て、お倉婆くらばあと内密話ないしやを試みてゐる、その内容といふせのは、今日、人に誘はれて、築地の異人館へ見物に行つたが、萬事なか／＼大が／＼りなものであること、處で、その異人館の大番頭が、らしいやめんの口を一つ欲しがつてゐる、そいつを一つ桂庵をつとめて儲けやうと思ふんだが、何とおつかさんお前に一肌脱いで貰ひてえと云ふのはそこなんだよ、といふことにあるらしい。

「そいつは耳よりだね」

慾に目の無いお倉婆くらばが耳をふくらませると、金公が續いて、一口にらしいやめんといふけ



れど、いかに西洋人の相手になることが、下手な日本人の相手になることよりも有利な事業であるかを説いて、お倉婆あの耳をいよ／＼ふくらませる。だがねえ、話の口は、そのら、し、や、め、んにもなかく先方に好みがあつて、第一、藝妓や女郎衆の、金で自由が利く奴ではないけず、さうかといつて伊豆の下田の唐人お吉なんていふ潮風の染み過ぎたのでもいけず、お睦元の固い處では、いくら困つても、娘をらしやめんにでも仕立て、見やうといふほどに開けた奴はゐねえ、素人ともつかず、玄人ともつかず、娘でなく年増でなく、下司ではないけないが、さうかといつて上品振るのは尙いけない、こいつを旨く仕果せた日には身に餘る福の神を脊負ひこむのだが……なかくその人選が容易でないと、一旦は頭を痛めたが、案ずるより生むは易いとでも云つたものか、實はびつたりとその注文にはまりさうな代物が眼の前にあるから不思議ぢやないか、下地は好きなり御意はよし、といふ心當りがあるから妙なもの、處で、今晚一つこの場で、おつかあに肌ぬぎが願ひたい、といつて時節柄、うっかり唐人をこんな處へ連れ込む處を、當時流行の浪士マネにでも見られやうものなら尊王攘夷覺えたか！ 眞向上段と來るから、今晚、その毛唐さんを御數寄屋

さんか何かの隠れ遊びに仕立て、この處へ連れて参りますから、萬事その邊ばかりなく——その代り話がまとまつたと來た日には、相手が異人館の大番頭だ、つけ届けは毎年々々船で來やうといふものだ……といふことを金助がお倉婆あに相談して、お倉婆あをして「あゝいゝとも／＼、幾らでも頼まれてあげるから持つといで」と大呑みに呑み込ませてゐる處へドタンバタンと凄まじい音がして天上から大女が降つて來たものです。

## 九十一

力持ちのおせいを退却させてしまつてから神尾主膳は、この時、そんな事はどうでもいゝといふ氣になりました。それは、むやみに眠くなつたからです、主膳は酒亂の萌す前に必ず一度眠くなることがある、その眠りをうまく眠らせさへすれば、酒亂が、すんなりと通過して終ふことがある、それが眠りそびれた時に、何かの引火薬でもあらうものなら、それこそ大變である。

主膳としては、近頃の酒量であつた、最初からでは可なりに飲んでゐる、さうして今眠くなる、本来、蔭間を呼んで見るなんぞといつたことは一時の氣紛れに過ぎないので、それに執心を持つて来たわけでも何でもないから、そんなことは、どうでもいゝように眠くなつたのです、さうして、最初の通り、脇息を横倒しにして、ゴロリと横倒しになり、心地よかりさうな眠を眠りはじめました。

昏々として、どの位の間、眠りこけたか、それはわからない、或ひは、ほんのうたゝ寢の束の間を破られてしまつたのかどうか、それも分らないが、

「御前——お眼ざめ遊ばせ」

枕にした脇息を揺り動かされたことによつて、醉眼をバツト開いて、朦朧として四邊あだりを見廻すと、夢からさめて、また一層の夢心地に誘ひ入れられたことは、幸ひでした、さうでなければ、甘睡半ばで、揺り動かされた肝臓が、酒亂の持病を引つれて、ガバと爆發したかも知れない、

「何だ、これはどうしたものだ」

あたりは、ぼうつと紅べにのやうに明るい、それに、この座敷の襖が、すつかり通して取り拂はれ、大きな踊りの間になつてゐる、踊りの間は勾欄つきで、提灯や雪燈が華やかに點いてゐる、——

はゝあ、いつの間に、伊勢古市の大樓あたりへ持ち込まれたか知らん——といふ氣になりました。

なほ、よく眼をさまして見ると、舞臺がある、花道がある。舞臺の上には一人の俳優が鎗を持つて立つてゐる。

はゝあ、踊るんだな、まだ充分醒めきらぬ眼で、その俳優の風俗を見ると、それは繪で見た水木辰之助の鎗踊りといふやうなものにそっくりです。

主膳が、眼を、拭ぬぐつて起き直つた時に、踊りはじまる。

鎗を上手に扱つて、その少年俳優が鮮かに踊る、主膳は、うつとりして、眼をすましてその途端に、三味線と太鼓と拍子木が入る、踊も古風でよくわからないが、耳をすまして見ると、

槍師槍師は多けれど

名古屋山三なごやまさんは一の槍

といふやうな、古謡がはさまれてゐる。

「殿様、お氣に召しましたか」

これはしたり、自分の席の後ろには、お倉婆が、かいどり姿で濟まし返つて座つてゐる。  
「うむ」

「お氣に召しましたらお手拍子を遊ばしませ」

お倉婆あも、手拍子を打つから、主膳もそれにつれて、

槍師、槍師は多けれど

名古屋山三は一の槍

とうたひながら、主膳も思はず手拍子を打つと、美少年は喜こんで踊りながら、

トコトコヤレ

トコトコヤレナ

といふ。お倉婆あが

女かと思れば男の萬之助

とうたふと、俳優が

ウントコトツチャア

ヤットコナア

と合せて槍を振る

槍の權三は美しい男

どうでも權三は美しい男

お倉婆あが年に似合はない美聲をあげる

しん／＼とろりと美しい男

踊り子は踊りながら手招きをする。

それから主膳は、夢だか、うつゝだか見當のわからない境へ誘ひこまれて、そこから再度の眠り慾が勃發して、いゝ心持で、むやみに眠つてしまひました、今度こそは、東の間のうたゝ寢を揺り動かされる心配はなく、思ふやうに眠を貪ることが出来るのを喜んで眠りこくつてゐる。

ほとんど、どの位の間眠つたものか、自分にも分らないが、醒めた時は、寢不足と酔とは二つながら、すつかりさめ切つてしまつてゐました。

だが、時間の方は醒めてはゐない、眼と酔とが醒めた時は、たしかに夜中であることに氣のついたのは長い思案の後ではなく、寢間の状態もはつきり眼にうつると共に、近くに離れもゐないのも、ゐない奴が悪いのではなく、程よい時間で、お暇乞をして行つてしまつたものであることはハッキリとする、酔つてゐない主膳は、それも無理ではないと思ふ。

枕許の酔ざめの水を飲んで、うまいと思ひ、それから手水に行かうとして、ひとり立ち上つた足どりも、あんまり危なげはない。

勝手知つた廊下を歩んで行く。

成程 夜は更けてゐる、何時か——おや／＼鶏が鳴いてゐるわい。

夜明けの近いことを知つた主膳は、何だか一種異様の里心さとこころといつたやうなものに動かされて、本當にはつきりした氣持で、また廊下を歩いて歸りました、たまに、こんな氣紛れ遊びをすることも、頭が冴えていゝものだ、幸にして亂に落ちなかつたのは、我ながら上出来といふものだ、いや、我ながらではない、こゝのお倉婆あゝの趣向が上出来といふものだらう、あの婆あ、煮ても焼いても食へない奴だが、それでも、人のふところを見て取扱ふ呼吸は手に入つたものだ。

酒に酔はせるよりは踊に酔はせて夢心地のうちに人を抱き込む處なんぞは、伊勢古市でやつてゐるやうな仕組だが、あんなにされると、アラが知れない。

主膳は、こんな事を考へて、ニタリ／＼と合點しながら、廊下を歸つて、自分の座敷へ戻つたのだが——戻つたつもりなのだが、それは三つばかり行き過ぎた隅の、間取りがよく似た外の座敷であつたことは障子を開いて、足を踏み入れた途端に、それとさつたので狼狽ばかしました。

何が頭が冴えたのだ、何が上出来なのだ、危ない！ 危ない！  
と氣がついたのは、慥かに遅かつたのです、

「誰あれ？」

中から、なまめかしい女の聲がしました。

「しまつた！」

主膳は、我ながら、しくぢつたことの念入りなのに、呆れたのが、  
いよ／＼一方の主をおさまらたものにしてしまひました。

「お倉婆さん」

なまめかしい女の聲が追かけるやうに續いたものだから、

「いや、なに！」

主膳は、逃げるやうにこの場を立ち去るより外に手段のないことを知りました。

「まあ、お倉婆さんぢやないの」

中の主は、さすがに、そのまゝでは濟まされぬ氣になつたらしく、そわ／＼と着物を引

寄せて起き出ようとする

「失禮、失禮、座敷を間違へました」

主膳は、これだけの訛言を捨てりふにして、まつしぐらに自分の座敷に来て、夜具をあた  
まからかぶつてしまつたが、先方も、こゝまで追つかけて来る氣遣はない、さりとして、ま  
たけたましく人を呼び起して、たつた今、この座敷へ怪しい者が入りましたよと、騒ぎ  
立てる氣配もないらしい。

多分、先方は、戸惑ひをした粗忽かしい客人の仕事だらうと、苦笑ひをしてゐる事だらう  
此方もホット息をついて、我ながらの失敗に、苦笑ひが出きらないでゐたが、その苦笑ひ  
の底から不意に、

「今のあの聲は、あれはお絹ではないか」

勃然として斯う云ふ偶想が起ると怪體な雲がむら／＼と目口を覆ふのを感じました。

あゝ、思ひ返して見ると、今のあの、なまめかしい聲の由は、お絹ではなかつたか。どうも、お絹の聲らしい、娘の聲でもなく、藝妓あたりの調子でもない、甘つたるくて、妙にかさにかゝるやうな云ひぶり、こちらがあはてゝゐたから、その場で聲の、味までは届かなかつたが、今、耳の底から取り出して見ると、お絹でなければあの聲は出ないやうに思はれて仕方がない。

だが、幾らなんだつて、そんな事は有り得る事ではない、あの女はあの女だけのものだがいくらあの女だつて、自分が今晚、こゝに遊んでゐるといふことを知りながら、こゝに泊りに来る筈もあるまいではないか。

もしや、自分の行動をよそながら監視に来て、泊り込んだものでもあるか、それも馬鹿正直な見方だ、第一、あの女が、こちらから監視をつける必要こそあれ、おれの遊びに一々、眼を放さないほど、こつちを重んじてゐるかゝるまいか。

偶然——おれが此處へ泊つたのが偶然なら、あの女がこゝ、泊り込んだのも偶然だ、偶然の縁合せとしたら、議論にはならないが、事柄はいよく妙ぢやないか、第一、おれの偶

然の方には、偶然たるべき理由があるが、彼女には何の理由がある。

彼女は、今日、異人館を見に行つたのだ、朝から出かけたから、晩までには當然、根岸へ歸つてゐなければならぬのだ、おれの方は、成程、あとから行くといつて置いた事に相違ないが、さういふ約束が、今まで完全に守られてゐるかゝるまいかは、彼女がよく知つてゐる筈だ、約束はしたけれど、途中から氣が變つて、こゝへしけ、こんだのに、何の不足がある、それなのに、晩までには根岸の屋敷へ歸つてゐなければならぬ筈のあいつが、此處へ泊り込んでゐるとしたら、全然、理由がなりたゝないぢやないか。

主膳は、こゝで、むらくと自分勝手の邪推の雲が渦になつて胸から湧き上りました。

「よし、見届けてやる、今のあの聲の主がお絹であらう筈はないけれども、若しあいつであつたらどうする、いづれにしても、斯うなつた上は、この眼で、篤と見定めてやる、この眼が承知しない」

といふのは、今のはたゞ耳だけの判断に過ぎない、一方口を信ずるは、男子の爲さざる處だから、この上は眼に訴へて、のつびきさせず——といふ氣になつた時に、その二つの眼

の上に、意地悪く控へてゐる牡丹餅大の一の眼が爛々とかゞやきました。もう眠れない、また眠る必要もないのだが、この上は眠らない以上に働かせねば、この眼が承知しない。

斯う思ふと、三つの眼が、ハジけるほどに牙え返つて、胸の炎が、むら／＼と燃え返つて来たやうです。

といつて、主膳には主膳だけの自重もなければならぬ、このまゝ取つて返して、あの寝間へ踏みこんで、得心の行くまで面をあらためてやる——にしても、萬一、あいつでなかつたらどうだ。

彼女であつたとしても、あいつが果して、どういふ寐像ゆいざうをしてゐる、そんなことを思ふと胸がむか／＼する、酔ふてゐる時の主膳なら知らぬこと、兎に角、斯う頭がはつきりした時であつては、自分といふものを、自分で考へて見れば、見す／＼それと分つても、このまゝ他の室へ亂入するといふことは紳士(?)として許されないことだ、出来ないことだ、

「ちえッ」

夜の明けるまで待つより外はない、夜が明けたら、あいつもさう朝寐あさどもして居られまいから、成るべく早く身じまひをして、出かけるだらう、その時に透見すうけんをして、有無うむを云はさぬことだ。

「うむ、こゝでは朝風呂をたてる、おれは寐過した風をして、あいつが風呂場へ行く頃を見計つて、篤と實否をたしかめるに何の仔細はない」

何にしても早く夜が明けろ——主膳は蒲團の中で途方もなく悶えてゐる。

#### 九十四

夜が明けて、その正體を見届けることは、極めて簡単な仕事でありました。

風呂場に近い洗面所の鏡の前で、その女をつかまへる事の無難作であつたやうに、その正體を見現はすのも、極めて無難作なもので、

「お絹ぢやないか」

「まあ、あなた」

どちらも、その意外であつたといふ心持は同じことで、たゞ一方が怒氣を啣んで難詰の體なのと、一方が體裁を取りつくらうことに、あはてまいとしてゐる心組だけが違ふらしい。

「どうしてこんな處へ来た」

「それは、あなたこそぢやありませんか」

お絹は、やり返したつもりであるが、主膳は肯かない。

「おれの來るのは勝手だが、こんな處はお前の來る處ぢやない」

「随分手前勝手ねえ、わたしが來て悪い處なら、あなただつて、立ち寄れない筈ぢやありませんか」

「理窟を云ふな、一體、何しに來たのだ」

「何しに來たつていゝぢやありませんか、あなたこそ何しにお出でになりました」

「おれは、氣が向いから來たのだ、お前はこんな處へ來る筈ではなかつた」

「わたしだつて、氣が向かない限りはございませぬ……第一、あなたこそあれほど約束を、

なざつて置きながら、どうして、異人館へお出でにならなかつたのですか」

「うむ、それはな、都合によつて途中氣が變つたまでだ」

「途中、氣が變つた方は、それがよろしうございませうが、變られた方は見じめぢやありませんか」

「それは男の事だ、門を出れば、時と場合で思つたやうにばかりは行かぬ」

「時と場合もよりけりですね、わたしは、異人館で、どの位、あなたをお待ちしたか知れませぬ」

「おれは都合あつて、築地へ行くのは取り止めたが、お前に、こんな處へ立ち寄れとは言はない」

「わたしは、お義理でまゐりました」

「誰への義理だ」

「異人館の異人さんが、ぜひ、日本の踊を見たいとおつしやるから、わたしが、内密で御案内して來ました」



「異人を連れて来たのか」

「はい」

「お前と異人と二人でこゝへ来たのか」

「金公も一緒にまゐりました」

「金助が……さうして、その異人と一緒に此處へ泊りこんだのか」

「御冗談でせう——異人さんは踊を見るとそのまゝ歸つてしまひました」

「お前は、なぜその足で根岸へ歸らうとはしなかつた」

「もう、遅くなりましたからね」

「うむ、金助はどうした」

「金公も、異人さんを取り持つて、昨夜のうちに歸つてしまひましたよ」

「うーん」

主膳は、こゝで行き詰まつたやうなうめきを立てました。その頭は、やつぱりつむじ風のやうに捲いてゐる。

一通りの詰問には、一通りに答へてのけたこの女の言分を、そつくりそのまゝに承認出来るか、この上是非を言はさぬことは、泊つた座敷といふのへ踏み込んで見るばかりだ。主膳はかう考へてしまうと、あちらを向いて揚子を使つてゐるお絹を肩越しに睨まへながら、

「では、お前の座敷へ行つて、おれは一服してゐるよ」

「いけません」

「どうして」

「わたしが面を洗ふまでお待ち下さい、一緒に参りますから」

## 九十五

神尾主膳は、その日、根岸へ歸るとて、山下まで來ると、上野の山内を歩いて見る氣になつて、そこで乗物を捨てました。

乗物を捨て、頭巾をかぶつて、山内へさまよひ込んだのは、何か鬱屈して堪へ難いものが

あるからです、その息づまるやうな胸苦しさを晴らさうとして、さうしてワザと、上野の山のひとり歩きでも試みるといふ氣になつたものかも知れません。斯くて、知らず／＼東照宮の鳥居をくぐつてしまつた時に氣がつくと、かぶつてゐた頭巾に、知らず／＼手がかゝりました。

それは殊勝な信仰心がさうさせたのではない、習慣が本能に近くなつたやうなわけです、苟も祖先以來、徳川家の祿を食んで、その旗下の一人として加へられて來た身であつて見れば、忠義だの崇拜だのといふ心が有つても無くても、はゝあ、こゝは「東照宮」であつたなと感じないわけには行かなかつたのでせう。

家康といふ不世出の英雄があつて、三百年の泰平があり、そのお蔭で日本國——の少くともこの江戸の繁昌があり、我々旗下の安泰と驕慢とが許されたのだ、その本尊様の靈を祀る處が此處だ——

主膳の頭巾に、知らず／＼手がかゝつたのは、うつら／＼でも此處まで來て見れば、さすがに素通りは出來ない——といふ習慣性に驅られたやうなものでせう、それとも、敵に後

ろを見せるのが癪だといふ反抗氣分かも知れません。

「よし／＼鬼の念佛だ、久しぶりで東照權現に參詣して行つても、罰は當るまい」

斯う思つて、頭巾を外しながら東照宮の尊前まで神尾主膳が進んで行きました。

この鋪石の上で、主膳はふと、散々に引き裂かれた一つの御幣の落ちてゐるのを認めました、その御幣も容易なものではない、重い由緒ある神前でなければ見られない御幣である、それが無残に引き裂かれ打ち砕かれて、あまつさへ、土足で蹂躪してある痕跡が充分です、合點行かずと、尙も歩んで行くうちに、今度は、散々に砕かれた光るものゝ破片を認め、それが鏡であることを知り、その鏡も尋常の品ではなく、やはり由緒深い神社の神前でなければ見られない性質のものであることを直ちに認めました。

なほ、行くこと暫くにして、あらうことか、コテ／＼と人間の尾籠な排泄物が、煙を立てゝゐる、主膳はムツとして面をそむけて通り過ぎましたが、宮の前に来ると、そこに又異様なものを認めないわけには行きません。

人間の生首——といつても、幸に肉身の生首ではなく、何處から何者が取り來つたのか、

相當の木像の首が、三尺ばかり高い臺の上に、嚴然と置き据えられて、その傍らに捨札がある。

逆賊 足利尊氏の首

同 弟 直義の首

主膳はムカ／＼としました。

その途端、後ろの方、社司の住居あたりで、甲高い人聲がする。

「申分があらば、三田の四國町の薩摩邸まで參れ、それが面倒ならば、手近い處の酒井の巡羅隊に訴へて出ろ、逃げも隠れも致さぬ、我々は當時、芝三田の四國町の薩摩邸に罷在る、但し、薩州の藩士ではないぞ、當分、あれに居候をしてゐる身分の天下の浪士ぢや、薩州では西郷吉之助と益満休之助と、それから土佐の乾退助にかけ合へ」

斯ういふ風なことを聲高で罵つてゐるのを聞いた神尾主膳がブル／＼と身體を慄はして、東照宮の神前に立ち、さうして我知らず刀の柄を握りしめてゐることをさとりました。神尾主膳は、この時勃然として怒つたのです——何を怒つたのか、何か義憤を感じでもした

のか。

刀の柄を握り締めて立つた神尾主膳の身心が酒亂以外のことで斯うも激動したのは從來餘り見ないことでした。

## 九十六

久しく打ち絶えてゐた、信濃の國の白骨の温泉へ行つて見ると、そこの大浴槽の一つに、たつた一人で、湯あみをしてゐる一個の小坊主を見ることが出来ました。

「皆さん、どうして、わたしが白骨の温泉に来て、温かなお湯の中に、のんびりと斯うまで安らかに湯あみをしてゐるやうになりましたか、それを御不審の御方にお話し申せば長いことでございますが……」

果然！これはお喋り坊主の辨信でありました。

辨信は今し、人無き浴槽の中——この浴槽はお雪ちゃんをはじめ、北原君も、池田良齋も、その以前には、イヤなおばさんも、淺公も、その他、すべての冬籠りの客を温めたことの

經歷を持つ、無論、宇都木兵馬も、佛頂寺、丸山もこれで身を温めました。

ある時は、この浴槽の中から、天下の風雲が捲き起るやうな談論も飛びだしたり、鬱屈たる氣分で詩吟が出たり、いゝ心持で鼻唄が出たりしたのですが、ひとりで、特別の時間に、この浴槽をひとり占にして、しんみりと浸つてゐた者は、お腹に異状があると指摘されてから後のお雪ちゃん——それと、深夜全く人定まつた時分に、ひとり身を浸してゐる盲目の劍人——それ等の人に限つたものでしたが、今日は全くの新顔で、さうして、従来とは全く異例な辨信法師が、一人でこの大浴槽を占領し、抜からぬ顔で、温泉浴と洒落こんでゐる、さうでなくてさへたまらない、このお喋り坊主の長柔舌が、湯の温かさにつれて、留め度もなく溶けて流れ出すのは是非無いことです。

「皆さま、わたくしがあゝして、大野ヶ原の雪に迷ふて、立ち盡してゐたことまでは、皆様も御存知のことゝ思ひますが、あれからのわたくしは、自分のことながら、よく自分のことがわかりませんでございました、わたくしの頭の上で、鳩の鳴く音が致しますから、はて、不思議な鳴聲だと、それを聴いて居りますうちに、氣が遠くなつてしまひました、

つまり、わたくしは、雪の大野ヶ原に行き倒れになつてしまひましたのです、それが、幾時かの後に、またこの世に呼び戻されてしまひました、と申しますのは、無論、わたくしは、わたくし自身の力で蘇つたわけではございません、雪に埋れたわたくしといふものを、凍え死なない以前に助け起して下された方があればこそ、わたくしの命が助かりました。命が助かりましたればこそ、わたくしは斯うして安全に温泉湯あみを致して居るのでございます……それなれば、誰が、雪にうづもれて、——當然あそこで凍え死なねばならぬ、わたくしといふものを助けて下さいましたか、それを先づ申上げなければ、皆様は、わたくしが此處へ來てゐるといふことをうらお信じにならないかと存じます、大野ヶ原の雪にうづもれた、わたくしといふものを、偶然の縁で、再びこの世の中につれ戻しなされたのは、皆様も御存じか知れませんが、それは黒部平の品右衛門爺さんでございました」

辨信は、こゝまでは一氣に喋つて、それから手拭でツルリと二つ面を撫でおろして、さうしてお喋りを續けました。

「黒部平の品右衛門爺さんといふのは、黒部平の鴉籠の渡しの下に小屋を作つて、その中で

三十七年の間、岩魚を釣つて暮らしてゐたお爺さんでございませぬ、その品右衛門爺さんが、鐵砲を擧いで、大野ヶ原を通りかゝつた時分に、雪の中に埋もれて居りましたわたくしのからだの一部分を發見して、さうして掘り出して、用意の火打で岩蔭に火を焚いて、わたくしを煖めて呼び生かして下さいました、わたくしは氣がついて、目を開いて獵師さんに助けられたと見たものですから、その時に申しました、どちらのお方かは存じませぬが、殺生をなさる獵師の御身分で、人助けをなさる果報をあなたの爲に嬉しく存じますと、わたくしが申しました——」

して見ると、このお喋り坊主は、我にかへるとまづ自分の助けられたことの感謝よりも、助けた人の果報を祝福することが先に出たものゝやうです。

九十七

「黒部平の品右衛門爺さんは、さうして、わたくしを脊中にしよつて、雪をかきわけて、こちらへ連れて来て下さいました。品右衛門爺さんの脊中で、わたくしは眼に見ない母の

脊に負はれて故郷へ歸るやうな氣持が致しました、よくお助け下さいましたとも、ナゼ助けて下さいましたとも、わたくしは一言も、品右衛門爺さんに挨拶をしなかつたいでございませぬから、ドコ、このお爺さんがわたくしを連れて行つて下さるつもりか、そんなことは一向にお尋ねをいたしませんで、母の脊中にスヤ／＼と眠るやうな安らかさで、品右衛門爺さんの行く處へ行くことを甘んじて居りました、もとより、その時は、この人が黒部平の品右衛門爺さんであることだの、駕籠の渡して三十七年間、岩魚を釣つてゐたことだの、そんなことを知つて居ります管もなし、どちらのどなたでございませぬかとお尋ねいたしたこともございませぬ、たゞ、わたくしを雪の中から掘り出して、脊に負つておいでになる、そのお方が獵師でおいでなさること、獵師と申しますと、失禮ながら殺生を業となさる、佛界の上から申すと、あはれ果敢ない御稼業と申すより外はござりませぬ、併し、この場合に、この爺さんが、わたくしに對してなさることは、殺生ではないと信じて居りまする故に、わたくしは安んじて、お爺さんの脊中に一切を任せてまゐりました、さう致しますると、かなりの時間の後に、この品右衛門爺さんが、ある所までわたくしを連

れてまゐりまして、そのある處じ、お手和らかに、わたくしを脊中から卸ろして下さいまして、さうして温かい爐邊の熊の皮の上に座らせて下さいました、わたくしはそのして下さいの通りになつて居りましたが、そこはこの白骨でございませぬ、最初は獵師さんの住居かと思ひましたら、さうでもございませぬでした、獵師さんの外に、わたくしを勞つて下さる方があることを知つて、これはその方のお住居だとさとりました、そのお方は、やはり温かい心と物とを以て、わたくしをいはり下さる上に、温かいお粥を煮て、疲勞した身に過分にならないほどに心づかひをして、その温かいお粥を、わたくしに食へさせて下さいました、あとで承ると、こゝは乗鞍嶽の麓で、鐙小屋といふ小屋の中でございました、わたくしに温かい心と温かいお粥を下されたのは、この鐙小屋の中で行をしておいでになる神主さんと承りました、獵師さんといひ、神主さんといひ、まことに親切極まるお方でございましたけれど、わたくしは、このお二方に向つても、強いて再生の恩を謝するといふやうなことを申しませんでした、申しませんが、おわかりになることとでございますが、わたくしといたしましては、今更それを繰返す心にはなれないのが不思議でございます。

口幅つたい申分ではございますけれども、生死といふことは、旅路の一夜泊りのやうなものでございますから、生きてゐることが必ずしも歡喜ではなく、死に行くことが必ずしも絶望なのではございません、いつも申上げることですが、如何に生きようとしてもがいても生き得られない時には生きられません、如何に死なうとしても焦つても、死を與へられる時までは人間といふものは決して死ぬるものではないと、わたくしは、この頃になつて漸くこの悟りがわかりました、その事の最初は、皆様のうちには、御存知のお方もございませうが、江戸の外れの染井の傳中といふ處の、ある屋敷の中で、神尾主膳殿といふお方の爲に、わたくしは生きながら深い井戸の底へ投げ込まれてしまひました、その時に、わたくしは懸命になつて、まだ死ぬまい、こゝでは死ねない、死にたくないともがきましたが、その甲斐もなく井戸の底へ投げ込まれてしまひました、その時に、死なねばならぬことは當然すぎる程當然でしたけれど、不思議にわたしは死にませんでした。井戸へ落されるまでは、死ぬことを忌がつて、車井戸にしがみついて、力限り根限りに泣き叫びましたがいよく井戸の中へ落された時に、私は泣かないで、却つて歡びました」

## 九十八

「その後とても、現在、わたくしほどの者が斯うして、こゝまで生きてこられたといふことが物の不思議でございます、わたくしのやうなものでも、此の世に生かして置いてやらうとの、お力があればこそ、斯うして生きて居られるのでございます、よし、わたくし自身といたしましては、こんな無智薄信の不自由な身が、この娑婆の中に、足あとほどの地をでも占めさせて置いていただくことが、この世にとつては、いかに御迷惑な儀でありわたくしに取りましては、軽からぬ苦痛の生涯でありませうとも、生かし置き下さる間は死なませぬ、死ねない間は、わたくしは、わたくしとして、與へられたこの世の中の一部分の仕事はまだ盡きない證據ではございますまいか、言葉を換へて申ますと、わたくしの身が前世に於て犯した罪惡の未だ消えざるが故にこそ、わたくしはこの世に置かれて、その罪業をつぐなうのつとめを致さねばなりません、あゝ昨日は雪の中で凍えて死なんとし今日は斯うして、のんびりと温泉につかつて骨身をあたためる、あれも不幸ではなから、こ

れも幸福として狎るゝ由なきことでございます、きのふの不幸は、わが過去の業報でありけふの幸福は衆生の作り置かるゝ善根の果報であることを思ひますと、一切がみんな他事ではございません、さあ、もうこの位にして上がりませう、お湯から出たら、この爐邊へ来てお茶をあげると北原さんといふお方がおつしやつて下さいましたから、これからわたしはあの爐邊へ行つてお茶を招ばれるつもりでございます、この温泉場には、今年は珍らしく、多數の冬籠りのお客があるさうでございます、あの爐邊が殊の外賑ふ、辨信お前も珍らしい新顔だから、こゝへ来て旅路の面白い話をしろと、皆様からもすゝめられましたから、わたしもこれからお茶に招ばれながら、皆様のお話も承つたり、それからわたしの話も申し上げたいと思ひますが、わたくしは、どうも御存知の通りの癖でございます、話をはじめると長うございますから、時と場合を慮りまして、皆様の御迷惑になるやうな場合には、慎んで控へて居やうとは心がけてゐるのでございますが、本来、わたくしのこちらへ志して参りましたのは、どうも、あのお雪ちゃんの聲で、頼りにわたしに向つて呼びかける聲が、わたくしの耳に響いてなりませぬから、その聲に引かされてこちらへ参

つたような次第でございますが、参つて見ますと、こゝにお雪ちゃんがゐないといふことは——それは、大野ヶ原へ来る前から、ふつと勘でわかりました、お雪ちゃんがゐない以上は、わたくしのこの地に来るべき理由も、止まるべき因縁も無いやうなものでございますが、こゝへ導かれたといふこと、そのことにまた因縁が無ければならないと存じました、これはわたくしの力ではござりませぬ、さうかといつて、わたくしを助けてお連れ下さた獵師さんや、燈小屋の神主様のお力といふわけでもござりませぬ、全く目に見えぬ廣大な御力の引き合せでございます、この廣大な御力が何故に、わたくしをたづぬる人の既に行き去つたあとのこゝまで導いて下さつたか、その思召は今のわたくしではわかりませぬ、わからないのが道理でございます、分らうといたしますのも僭越でございますから導かれた時は導かれたまゝに、そこに己れの全力を盡して善縁を結ばうといふ心が、即ちわたくし共の爲し得るすべてをしなければならぬ、古人は隨處に主となれと教へて下さいましたが、どうして、どうして——わたくしなんぞは隨處に奴となれでございます、どうぞ皆様、この不具者のわたくしで宜しかつたならば何なとお命じ下さいませ、琵琶は少々心得

て居ります、何卒、この不具者に出来るだけの仕事をさせて可愛がつてやつていたゞき  
 たうございます、あゝ、いゝ心持ちになりました、白骨のお湯は、わたくしの骨まで温めて呉れました、わたくしはこれから皆様の爐邊閑話の席へお邪魔をいたして、また温かいお心に接し、あたゝかい焚火にあたらせていたゞき皆様のお話をおきゝしつゝ——わたくしも心靜かにお雪ちゃんの行方を尋ねたいと存じます」

## 九十九

辨信法師が浴槽から上がつて、例の爐邊閑話の席を訪れた時に、爐邊にはまた例によつての御定連が詰めかけて居りました。

御定連といふうちにも、お雪ちゃんもゐないし、久助さんもゐないことは勿論だが、池田良齊を中心にして、北原賢次もゐれば、いつもの甲乙丙丁おほよそ面を揃えてゐる、たゞ見慣れない獵師體の人が一人、推察すれば多分、今、浴槽の中で、屢々辨信法師の口上つた黒部平の品右衛門爺さんであらうと思はれる顔が新らしい。



爐の中心には、例の大鍋がぶら下つてゐて、それには大粒の栗がゆだりつゝある、爐中の火は、木の根が赤々と燃えて、煙は極めて少なく火力が強いから、煙の立たない石炭を焚いてゐるやうで、一方には大鐵瓶がチン／＼と湯氣を吐いてゐる、なほまた爐中には蕎麥餅らしいのが幾つも地焼きにころがしてある、外氣が寒くなるにつれて、爐邊の人間味がいよ／＼増して來るのを常とする。

「皆様、お蔭様で、ゆつくりとお湯につからせていただきまして、ほんとうに骨までがあたゝまつてまゐりました、火で焚きましたお湯と違ひまして、天然に涌き出でますお湯は肌ざはりがまた天然に軟かでございますものですから、本當に久しぶりでわたくしは我を忘れてお湯の中へ魂までつけこんでしまいました、これも身心悦可柔軟といふ氣持の一つでございます」

普通、今晚は……だけの挨拶で済むべき處を一口にこれだけのお喋りをしながら、一座に向つて、ていねいにお禮を申しましたから、まだ辨信をよく知らない一座は何となく異様に感ぜしめられました。

「辨信さん、まあ、こつちへお出でなさい、さあ、こゝでおあたりなさい」と辨信を導いたものは北原賢次です。

「はい、有難う存じます、いえ、もう、こちらで結構でございます」

「遠慮なさらずに、こちらへゐらつしやい、さあ手をとつてあげませう」

「否、それには及びませぬでございます、では、折角のおすゝめでございますから、それに従ひまして、遠慮なく罷り出ますでございます」

「危ないですよ」

「否、大丈夫でございます、眼は御覽の通り不自由でございますが、御方便に勘の方が働きますものでございますから」

「いや、何しても、無事でお前さんが此處へ來られたことは奇蹟といふてもいい」

「はい、わたくしと致しまして不思議の感がいたすのでございます」

斯う云つて、辨信法師は爐邊に近い處へ、にちり出で、ちよこなんとかしこまりこんでしまひました。

「だが、辨信さん、お前さんも了見違ひな處がありますよ」

「有りますとも、有りますとも」

北原に云はれて、辨信が、ちよこなんとかしこまりながら、身體を軽くゆすぶつて、

「あります段ではございません、もと／＼一切が、わたくしの了見違ひから起つたことな  
んでございます」

「さう云はれてしまつては恐縮で二の句がつけないといふものだが、一體お前さんといふ  
人が、その身體で、見れば眼も不自由でありながら、今時、この白骨の谷へ、たつた一人  
で、出向いて來やうなんといふのが、そも／＼了見違ひの骨頂なんですよ」

「その通りでございましたが、どうも、わたくしの身を、こちらへ、こちらへと引きつけ  
てまゐる力があるものでございますから……」

「と申しますのは、かねて、わたくしの知り合ひの一人のお友達がございまして、その方  
がわたしに向つて、絶えず呼びかけておいでになります、辨信さん、一刻も早くこの白骨  
谷へ來て下さい——と云つて絶えず呼びかけて下さるその力が、わたくしをたうとう此處

まで引き寄せてしまひました」

## 百

「その力に引き寄せられて、わたくしは知らず／＼、この山の中に分け入りまして、遂に  
大野ヶ原の雪に立ち迷ふてしまつたといふ次第でございます、それは、向ふ見ずとお叱り  
を受けるかも知れませんが、いづれ、旅といふ旅で向ふ見ずの旅でないものが一つとして  
ございませうか、人間の一生そのものを旅といたしますと、出づる息は入る息を待たぬ  
とか申します、今日のことがあつて明日のことを誰れが知りませう、なかに、あなた、わ  
たくしの心得違ひは心得ちがひに相違ございませんけれども、けんじやうさんざうとん玄井三藏渡天の苦しみに比  
ぶれば、これは日本國のうちの、僅かに信濃の國の間の事——」

この邊に來ると一座が、漸くこのお喋り坊主が容易ならぬお喋り坊主であることに、  
やゝ怖れをなした容子でありました、これにのべつ喋べらせたらたまらないのではないの  
かとさへ、怖れ出したものもあつたやうですが、さりとして、それを抑止すべききつかけも

ないであると、辨信は一向透さず、

「何に致しましても、わたくしがあの雪の大野ヶ原の中に立ちすくんで居りました時に、ふと、わたくしの耳許で私語く聲がいたしました、それは人間の聲であらう筈がございませんが、人間同様のなつかしさを傳へて呉れる小鳥こどりの聲でありました……」

と云つて、辨信が小首を傾けたのは、その話頭にのぼつた場合の小鳥の聲を再び耳にしたからではありません——そこで暫くお喋りお喋りの糸をたるめてゐたが、全く調子を換えて。

「外そとへどなたかお出でになつてゐます」

「何ですか」

「今、あちらの方の山を越えて、この宿へ参つた方がございます、その方が、戸外そとで御案内を乞ふて居りますよ」

「そんな筈は無いよ」

といつてゐる途端に、表の戸をドン／＼と叩く音がしました。

音がして、はじめて爐邊の一同がそれを合點したので、辨信のは、それより以前話し半ば

で、その事を云つてしまつたのです、そこで一同が、何となくぞつとしました。

「誰だい」

「え、わたくしでございます、夜分おそくなつて相済みませんが」

「わたくし……と云つたつて誰だね」

一同は不審です、この夜中に、この處へ外から來るべき者の豫想は全くなかつたことで、内から出て行つて戻つて來たといふ面ぶれの缺員もなかつたからです、そこで、さすがに一同は、ゾットしてゐると、辨信が抜からぬ面で云ひました。

「あ、あれは久助さんですよ」

「え、」

「久助さんが來たのです」

「久助さんが」

一同は外の久助なる者の爲に戸を開けてやるよりは、内なる辨信の面を見直さないわけには行きません。

そのわけは、久助はたとへ夜中に不意にやつて来たとは云へ、この連中に取つて充分に豫備知識のある名前ですけれども、こゝへ風來に飛び込んで来た、この小坊主がどうして久助の名を知つてゐる、名を知ることが兎に角、まだ言はない先から、人の來ることを豫期し、面を見ないうちから、その人の名を呼び、しかも、その人の名の呼びつづりが自分たちよりも一層も二層も昔なじみであるらしい呼び方をする爲に、この小坊主が一時は妖怪變化の身でもありはしないかとさへ物すさまじく感じたからです、それにもかゝらず辨信は、いよ／＼心得たもので、

「間違ひありません、久助さんに間違ひありませんから、どうぞ、どなたか戸を開けてあげて下さいませ、何か、やむにやまれぬ用事があればこそ夜分、斯うして出て参つたのでございませう……わたくしも久しぶりで久助さんに逢つて積るお話をお聴き申さなければなりません」

### 勿來の卷(了)

## 大菩薩峠 (新定版)

著者 中里介山

東京市日本橋區吳服橋二ノ五

發行者 野口兵藏

東京市牛込區矢來町三六

印刷者 本間十三郎

東京市牛込區矢來町三六

印刷所 清揚社

東京市麹町區飯田町一ノ六

製本所 河手製本所

東京市日本橋區吳服橋二ノ五

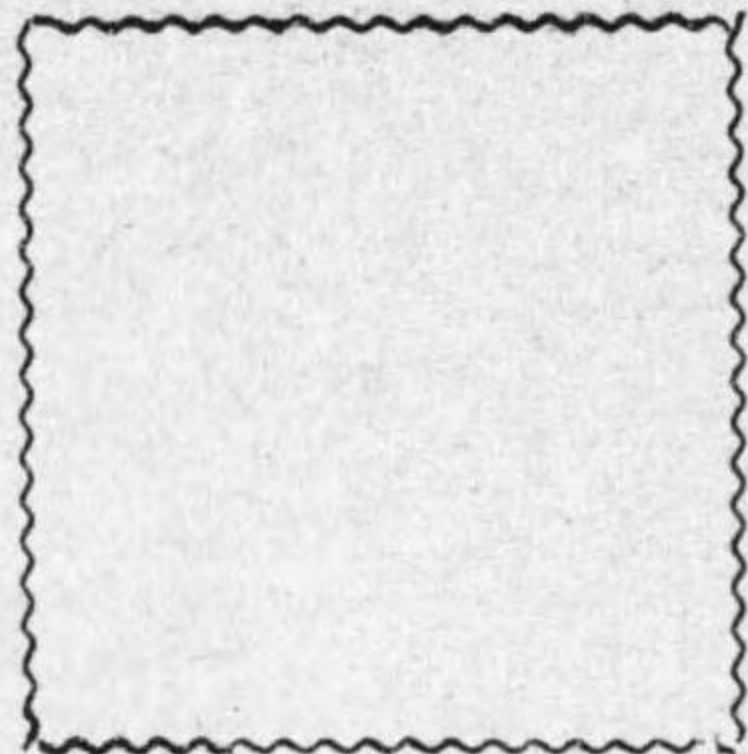
發行所 大菩薩峠刊行會

振替東京七五八三〇

電話(日本橋)一七七一

藏版 隣人之友社

一册【定價】 壹圓五十錢



昭和四十四年四月二十二日新定版第一刷印刷  
昭和四十四年四月二十二日新定版第一刷發行

# 大菩薩峠

(版定新)

(錢貳拾册各料送)・錢拾五圓壹册各價定・册五十第一册一第

第五册 他白無 生骨明 ののの 卷卷卷 (上)	第四册 禹小安黑 門名房業 三路の白 級ののの の卷卷卷	第三册 道慢お如 庵心銀法 と和様閣 八のの夜 ののの 卷卷卷	第二册 伯駒市女白東 耆井中子根海 安能騷と小山道 綱守動人のの のののの 卷卷卷卷	第一册 龍三壬鈴甲 の輪生鹿源 の神杉原の のののの 卷卷卷卷	第六册 他生の卷(下) 流轉の卷 みちりやの卷	第七册 鈴め 慕いのの ののの Oceanの卷	第八册 年魚市の卷	第九册 畜生谷の卷 勿來の卷	第十册 辨信の卷	第十一册 不破の關の卷	第十二册 白雲の卷 膽吹の卷	第十三册 新月の卷	第十四册 恐山の卷	第十五册 農奴の梗概
--	---	---	--	--	----------------------------------	-------------------------------------	--------------	----------------------	-------------	----------------	----------------------	--------------	--------------	---------------

「新定版」「普通版」共に第三册は「伯耆安綱の卷」の後を承け「如法閣夜の卷」に始る

# 大菩薩峠

(版通普)

(錢貳拾册各料送) 錢拾五圓壹各價定・册五十第一册一第

第五册 他白無 生骨明 ののの 卷卷卷 (上)	第四册 禹小安黑 門名房業 三路の白 級ののの の卷卷卷	第三册 道慢お如 庵心銀法 と和様閣 八のの夜 ののの 卷卷卷	第二册 伯駒市女白東 耆井中子根海 安能騷と小山道 綱守動人のの のののの 卷卷卷卷	第一册 龍三壬鈴甲 の輪生鹿源 の神杉原の のののの 卷卷卷卷	第六册 他生の卷(下) 流轉の卷 みちりやの卷	第七册 鈴め 慕いのの ののの Oceanの卷	第八册 年魚市の卷 大菩薩峠是非	第九册 畜生谷の卷 勿來の卷 大菩薩峠是非	第十册 辨信の卷	第十一册 不破の關の卷 大菩薩峠是非	第十二册 白雲の卷 膽吹の卷	第十三册 新月の卷 大菩薩峠梗概	第十四册 恐山の卷	第十五册 農奴の卷
--	---	---	--	--	----------------------------------	-------------------------------------	------------------------	--------------------------------	-------------	--------------------------	----------------------	------------------------	--------------	--------------

中里介山著作

# 大菩薩峠繪本

定價貳圓五拾錢  
送料十六錢

第一冊 「甲源一刀流の巻」より「間の山の巻」に至る

中里介山題文字  
同川洗一匡繪圖  
井田收一匡繪圖  
代田收一匡繪圖  
野口昂明繪圖

介山居士の親切な序文題字と、洗匡畫伯の艶麗な彩色繪「大菩薩峠十人女」圖と代田收一氏の綿密な内容繪圖面と、それから新進畫家野口昂明君が心血を濺いだ書面が百十八枚、何とも云はれない懐かしみのある繪本である。

中里介山著 大菩薩峠 形脚本

四六判一五〇頁  
定價一圓三十錢  
送料十錢

小説「大菩薩峠」は衆生業相の展開を曲盡し、その遊戯神通を寫して遂に入曼陀羅の實相に歸するの結構なるを以て之を形譯して上演する際此の意義に準據せざるべからず、本書は田中智學氏の紹介により嘗て帝劇にて興行の所謂演劇以上の社會的教化を期待して許諾した際の脚本と、同じ意義に於て歌舞伎座に於て興行したる脚本とを取纏めて一本となしたるもの。

——呈進録目書圖——

大菩薩峠刊行會發行

中里介山著

# 吉田松陰

三六判三百二十頁  
定價七十五錢  
送料九錢

革新教育の權化

本書は維新革命の典型的志士、吉田松陰の生涯を一々根據ある書物によつて、平明忠實に寫した傳記である。維新の先覺としての非常の士松陰を知ると共に、天成の教育家として師道の嚴たる、友愛の切なる、最も濃かなる心情を備へた、僅々三十年の人間の生涯を飾ることなく表現した、極めて意義深い力著である。今や國家總力を擧げて興亞新秩序建設の大業成就に邁進せんとする秋、また新たにこの人物及び學風を再檢討するの必要を痛感し、茲に増刷改裝して敢て江湖に獎むる所以である。

中里介山著

續日本武術神妙記

四六判上製・二五〇頁  
定價一圓五十錢  
送料十錢

——呈進録目書圖——

大菩薩峠刊行會發行

中里介山著

四六判美裝四一六頁

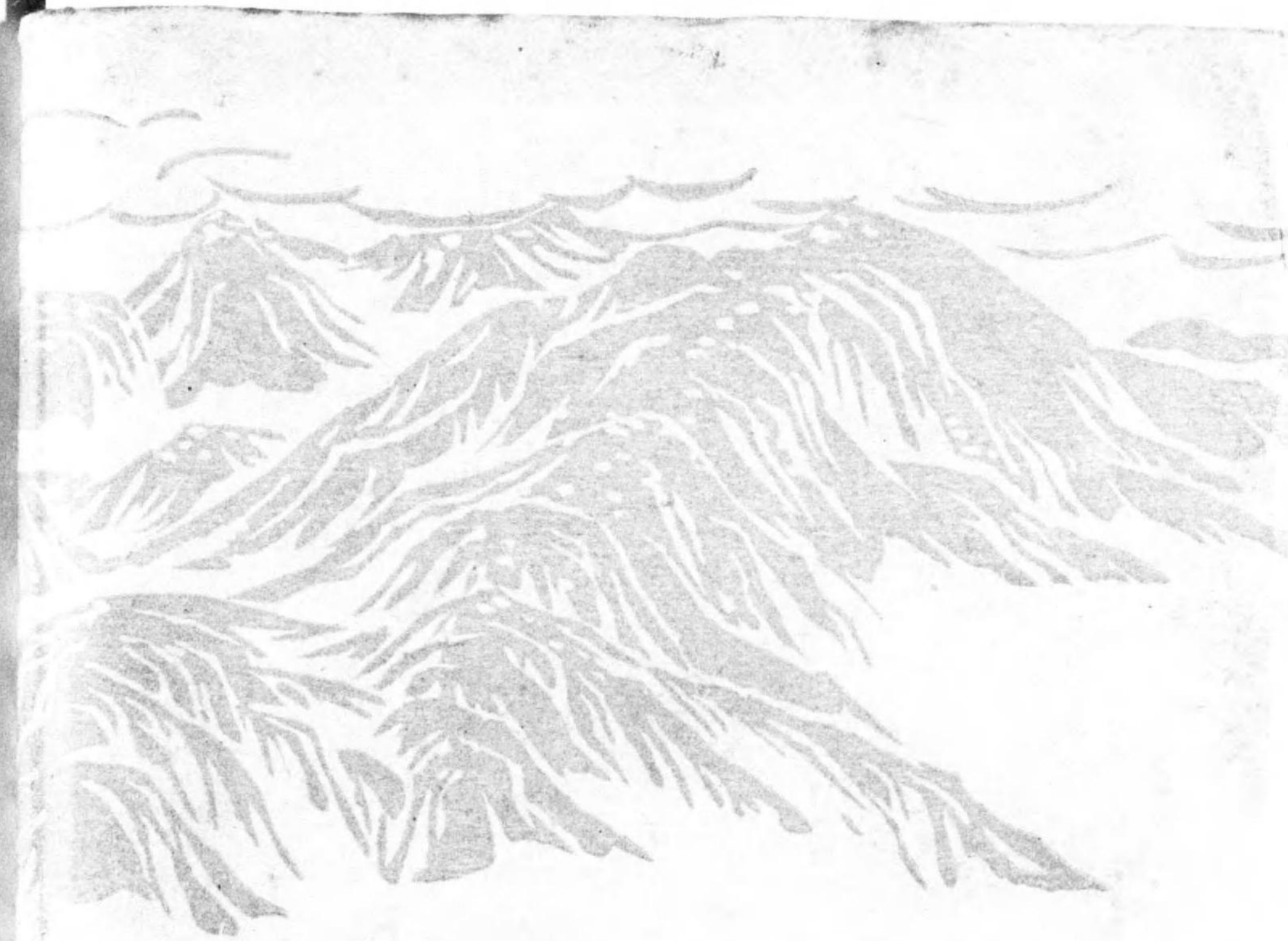
# 日本武術神妙記

定價一圓  
送料九錢

日本は武術の天才國である、これ神武天皇建國以前以後を通じての國民性であつて、決して蠻力の變形でも無ければミリタリズムの發現でもない。今や日本精神、日本精神といふ聲が一代に滿つるけれども、日本武術の神妙を知らなければ、日本精神を理解することは出来ない。日本武術のうち、戰國時代より徳川初期へかけての「流派」創生時代が即ち武術が科學的となり藝術的となつて、この神妙を表象したのである。本書は爾來維新前後に至るまでの、數百流の日本武術の粹を抜き、各々典據ある記録により、含蓄豊かな筆を以て、その神妙の仕合、悟道、實驗を寫したものである。従つて、舊來の小説講談の荒唐無稽を一掃し、技術の神妙が超人間に達する極意を教ゆることに於て、天下萬人の爲に此も無き修養書である。

東京日本橋區大菩薩刊行會 振替 〇三八五  
東京日本橋區大菩薩刊行會 振替 〇三八五

終



會行刊嶠薩菩大